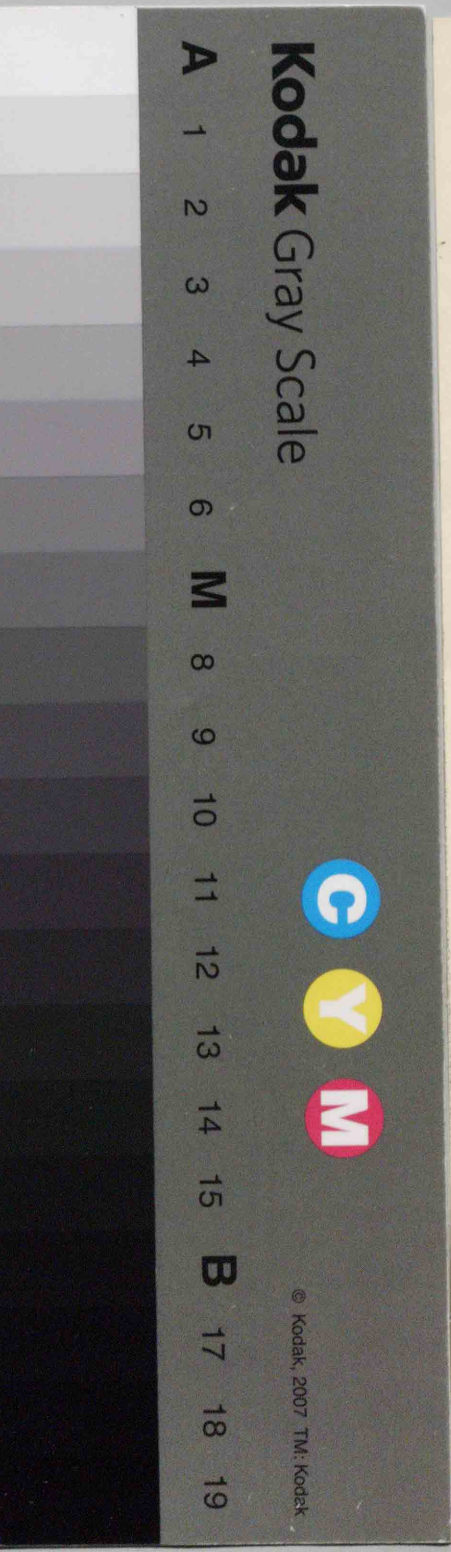
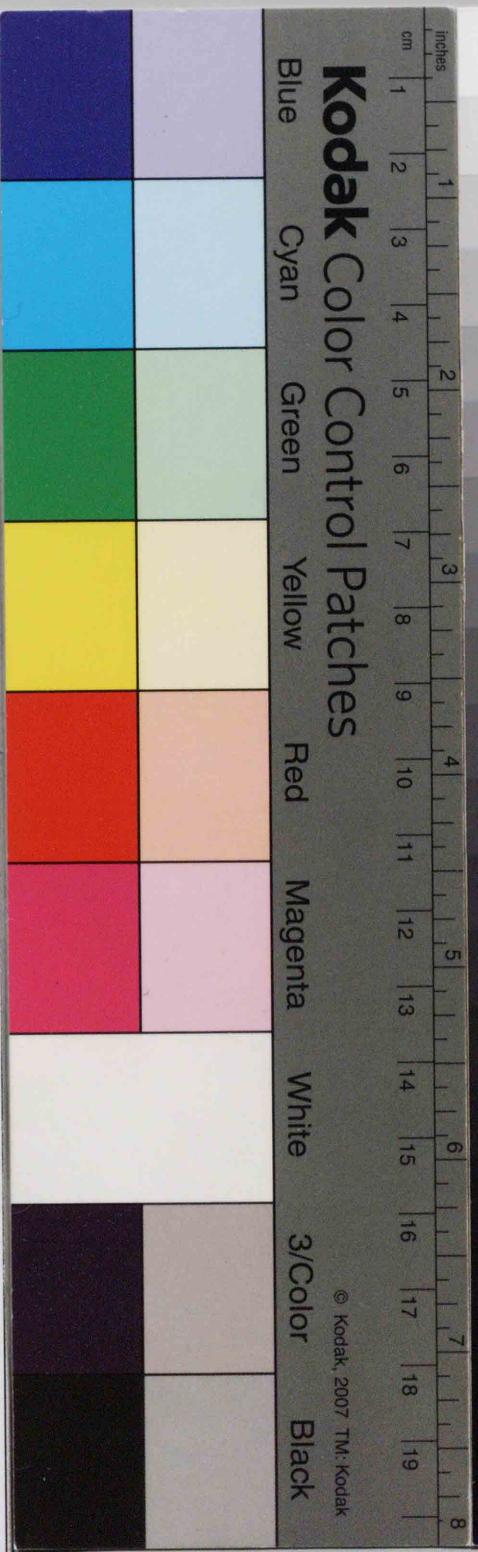


三訂 帝國讀本 卷七

4a
810
大12



41593

教科書文庫

4
810
41-1923
20000 65489



© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

429

810

大12

大正十二年十一月十四日
文部省檢定濟

文學博士芳賀矢一編

大正十三年版

三訂帝國讀本

東京

資會社 富山房叢刊

三訂帝國讀本卷七目次

- 一 花のさだめ……………一
- 二 日本文學……………四
- 三 をりふしのうつりかはり……………三
- 四 ワイマールより……………一五
- 五 晩春の別離……………三
- 六 平家雜感……………三
- 七 扇の的……………三
- 八 大原御幸其の一……………五〇
- 九 大原御幸其の二……………四



目次

一〇	仁は心の命	四九
二	皇太子殿下御成年の大典を祝し奉る	五五
三	川 柳	六四
三	小品二題	六六
四	春夏の句	六九
五	筑波山	七三
六	水都水郷	七七
七	湖沼と人類	八二
八	芳流閣上の血戦	八六
九	醒睡笑	九六
一〇	歌人西行其の一	九九
二	歌人西行其の二	一〇三

三	羈旅の歌	一〇九
三	孔子の故郷	一一
四	槩を横たへて詩を賦す	一七
五	支那の風景	二三
六	西郷隆盛論	二五

自修文

一	我が國の童話	一
二	世界的水路としての瀬戸内海	三
三	長 崎	九
四	佛法僧	一五
五	著作の苦心	三

卷七 目次 終

三訂帝國讀本 卷七

一 花のさだめ

本居宣長

花は櫻、櫻は山櫻の葉赤く照りて細きが、まばらにまじりて花しげく咲きたるは、またたくふべき物もなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山櫻といふ中にも、品々のありて、細かに見れば、一本毎にいさゝか變れるところありて、またくおなじきは無きやうなり。すべて曇れる日の空に見あげたるは、花の色鮮ならず。松などの青やかに繁りたるこなたに咲ける

こよなくお
く

色はゆ

さらなり

は、殊に色はえて見ゆ。空清く晴れたる日、日影のさす方より見たるは匂こよなくて、同じ花とも覚えぬまでなん。朝日はさらなり、夕ばえも。

むげに

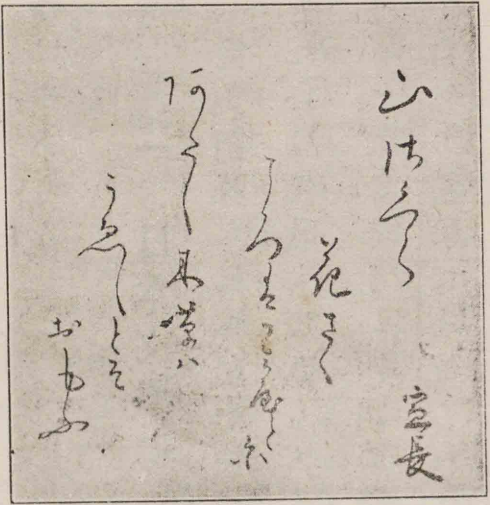
ねぶ
一残りなく散るぞめでたき櫻花、在りて世の中はてのうければ。
(古今集、讀人不知)

梅は紅梅、ひらけさしたる程ぞいとめでたきを、盛になるまゝに、やうくしらせゆきて、見所なくなるこそいと口惜しけれ。櫻の咲ける頃までも散ること知らで、むげに匂なくねびれ、萎みて残りたるを見れば、げに在りて世の中は何事も皆かくこそと、見る春ごとに思ひ知らるか。白きはすべて香こそあれ、見るめは品おくれたり。大かた梅の花は、小さき枝を物にさして近く見たるぞ、梢ながらよりはまされる。桃の花は、あまた咲きつゝきたるを遠く見たるはよし、近くてはひなびたり。

したゝかに

山ざくら花 宣長
さくころはわがやぎにあだし木草は植ゑじとぞおもふ

山吹、燕子花、撫子、萩、薄、女郎花など、とりくゝにめでたし。菊もよき程につくろひたるこそよけれ。あまりうるはしく、したたかにつくりなしたるは、なかくに品なくなつかしからず。躑躅、野山におほく咲きたるは目さむること、ちす。海棠といふもの、からめきてこまやかにうるはしき花なり。



(藏氏綱信木々佐) 蹟筆長宜居本

そもくかくいふは、みなおのが思ふ心にこそあれ。人は又思ふ心異なるべければ、ひとやうに定むべきわざにはあらず。又今様の世の人のもてはやすめる花ども、世に多か

ことさらめ
心のなし
僻心

るを數へいでぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にも詠
みならず、ふるき物にも見えたること無きは、心のなしにや、
なつかしからず覺ゆかし。されどそれはたひとやうなる僻
心にやあらん。

— 玉がつま —

二 日本文學

優美閑雅な日本語を使つて、平和柔順な國民が歌つた歌、
それには長歌も短歌もあるが、此等の歌が日本文學の基礎
といつてよろしい。四圍の美しい自然を歌つて、人事もすべ
て自然の譬喩に寄せられて居ることが、早く後世の文學の
特質を示して居る。古事記、日本紀の歌、萬葉集の歌等は即ち
其等の國民歌の幾分かを傳へたもので、推古以來支那の文

國民歌

山梯歌聖

(一)聖武孝謙兩朝
に仕へて中納
言持節征東將
軍に至る萬
葉集の撰者と
して傳へら
る。延暦四年
— 四四五年

明が傳はつて、段々と漢文漢詩が用ひられるやうになつて
も、日本固有の歌は、それとは別途に發達した。殊に上代から
の神祇を祭る詞、祝詞の形式を應用して、むしろ漢詩に對抗
して、特殊の國民思想を歌つたのが、柿本人麿、山部赤人等の
先輩歌人で、つゞいて奈良時代の^(一)大伴家持等である。萬葉集
には漢文渡來以前の歌も多く載せてあるが、かういふ新進
歌人等の歌も多い。優美典雅といふ點に於て、忠君愛國の思
想に於て、よく日本國民の上代思想をあらはしたものであ
る。

漢文渡來勅撰
漢詩

奈良時代に出來た萬葉集は漢字を以て記された。漢字の
音訓を用ひて、日本語を記したのである。平安朝になつて百
餘年の間に、假名の發達があつて、平假名で自由自在に國語

平安朝
假名文

日記
隨筆
假名物語

三訂帝國讀本 卷七

六

抒情詩
叙事詩

勅撰和歌集

藤原宣孝の
院に仕ふ。
院の中宮上東門

歌人清原元輔
の女。一條天
皇の皇后定子
に仕ふ。

文藻

和歌材料
思想

主觀材料
思想

物語材料
思想

客觀材料
思想

抒情詩
叙事詩

を記すことになつた。是に於て、假名文の發達が著しくなつた。
萬葉集の後をついで、古今集以下の勅撰和歌集が出来たのみでなく、竹取物語、伊勢物語を物語の祖として、數多の假名物語、日記、隨筆の類があらはれた。就中有名なのは紫式部の源氏物語と、清少納言の枕草子で、漢學の素養が其の文藻を助けたことは、見逃されぬ事であるが、上古以來行はれた和歌の風流が、常に此等の文學の背景となり、基礎となつて居るのは、争はれぬ事實である。大鏡や、榮華物語などいふ史實を記した物語も、つまりは其の材料を一轉化したのである。奈良時代の和歌即ち抒情詩が、平安時代には物語即ち叙事詩と發達したのである。

鎌倉時代

軍記物語

思想

諸行無常
愛別離苦

鎌倉幕府の創立と共に、時代は一變した。随つて文學も一變した。源平二氏の争が材料に採られた保元物語や、平治物語や、平家物語や、源平盛衰記などといふ軍記物語が、佛家の諸行無常、愛別離苦の思想の下に筆述せられた。降つて吉野朝廷の頃の太平記も、同じく軍記物語である。平安時代の盛時とは其の材料に於てこそ、それ〴〵差別はあれ、叙事詩たる事は同様である。材料の變化と共に、言語も變化して、漢語及び漢文脈の加つて來たことは、自ら其の内容と外形との調和を保たしめて居る。徒然草、方丈記なども、佛敎の深い感化から生れた此の時代の著名な産物として數へられる。
足利將軍の世は、概して戰亂時代で、無學の世と稱せられて居るが、明朝との交通も繁く、繪畫をはじめ美術工藝の進

二 日本文學

七

(一)足利將軍。應永十五年(二〇六八)薨。年五十一。

劇詩

歩も著しく、鎌倉の末からの進歩を承けて、將軍義滿の頃に至つて、能の發達大成を見るに至つたのは大いに注意すべき事である。平安、鎌倉二時代を通じての叙事詩は、此に至つて劇詩の形をなしたのである。能は其の後徳川時代を通じて衰へず、今日に傳はつて尙盛であるのを見ても、如何に我が國民の嗜好に投じたものであるか、分る。其の材料としては、上代の萬葉集から中古の古今集、伊勢物語、源氏物語等は勿論、平家物語、源平盛衰記、又義經記、曾我物語などの軍記物語に及んで居り、又世話材料も入れてある。歌方から言つても、音樂の方から言つても、舞の方から言つても、出来るだけ當時の粹を抜いたもので、寧ろ其の精華を集めたものと言つてもよい。あらゆる美術の方面を集大成したものと

世話材料

集大成

(五)徳川時代

漢學國學の勃興

印刷術の進歩

俗文學の勃興

能の演劇

翻刻

俗文學

樂天洒落

して、當時の武士の修養に資したことは多大であつた。

徳川時代に至つては、學問の復興から、漢學が更に唐宋時代の精華を學んだのは勿論、儒學に於ては、支那に於ても稀な程な大儒が輩出した。また國學の研究も盛になつて、久しく忘れられて居た平安時代以前に遡つて、萬葉集も研究せられ、源氏物語も研究せられた。印刷の方法が進んで、古書の翻刻が盛になつて、庶民みな太平の世を樂しんで、靜かに文學を翫味するの餘裕を得た。漢學國學の勃興につれて、専ら平民社會に行はれた所謂俗文學が發達した。淨瑠璃や、小説や、俳句や、狂歌や、川柳やが和漢古今の文學に根ざして、新しい國民思想の花を咲かせた。昌平時代の樂天洒落な氣風と、義理人情に勇み立つ犠牲的精神とが、此等の各種の文學の

(一) 徳川第五代將軍。徳川第十一代將軍。
 (二) 本名杉森信盛。長門の人。享保九年(一七三三)歿。
 (三) 本名瀧澤解。江戸の人。嘉永元年(一八二五)歿。
 (四) 八十二。

上に溢れて居る。綱吉將軍の元祿時代と、家齊將軍の文化文政時代とが其の最大繁盛な時世であつた。淨瑠璃の近松門左衛門、俳句の芭蕉は元祿の世に屬し、小説の瀧澤馬琴は文化文政の世に屬する。其の他の作家は數限りもない。平民社會の嗜好に投じたため、中には材料思想に鄙陋なもの尠くないのは遺憾である。演劇の發達の著しかつたことも、注意すべき事柄である。かやうに平民文學の發達したのは、一面に於て平民社會の勃興を意味するので、日本の國民が東洋の諸國中、明治大正の御代を待つて大いに世界に活躍するといふ氣運が、已に其の上に示されて居るやうに感ぜられる。

明治大正
 刷印済

維新以後の進歩は、ひたすら西洋文學の新味を加へたこ

外國語
 西洋文學
 各種思想

傾向生命
 新

扞格
 調

とて、東西文明の融和は、我が國文學の上に於ても、いち早く認められるのである。最初は平易な英文の小説、詩歌の翻譯がら始つて、次第に佛、獨、露、瑞諸國の文學を咀嚼するに至り、歐米の新思潮は抒情詩、叙事詩、劇詩の各方面に亘つて、常に新しい傾向生命を我が文學の上に及しつゝあるのである。上古以來の國文學の研究も益盛になつて、一層根柢あり、權威あり、價值ある文學の興るのは、近き將來に期待せらるべきことである。但し新奇を競ふの餘り、往々我が國體と相容れず、我が國民性と扞格する思想の輸入せられることもあるので、其の間の調節は大いに考慮しなければならぬのである。

田本よりうつりかはり

(一)「春はたゞ花の
一へに咲くばかり、
物にあはれは秋ぞ
まさる。」
(拾遺集、讀人不知)

三 をりふしのうつりかはり

吉田兼好

をりふしのうつりかはるこそ、物毎にあはれなれ。物(一)のあはれは秋こそまされ。と人毎にいふめれど、それもさるものにて、今ひとときは心も浮立つものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやうく、氣色立つ程こそあれ、折しも雨風打續きて、心あわたゞしう散過ぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古の事もたちかへり、戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨て難きこと多し。

氣色立つ

おぼつかなきさましたる

名詞

(一)陰曆四月八日。
(二)賀茂祭。四月の中の酉の日。
水鶏のたゞく

(三)六月晦日の大祓。

取りあつめたる事

腹ふくるゝ、わざ、かいやり捨つべきもの

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世のあはれも人の戀しさもまされと人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめ葺く頃、早苗とる頃、水鶏のたゞくなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月ばらへまたをかし、棚機祭るこそ艶かしけれ。

やうく、夜寒になる程、雁鳴きて来る頃、萩の下葉色づく程、わさ田刈干すなど、取りあつめたる事は秋のみぞ多かる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくればみな源氏物語、枕草子などに事ふりにたれど、同じ事又今更にいはじとにもあらず。おぼしき事はぬは腹ふくるゝ、わざなれば、筆に任せつゝ、あちきなきすさびにて、かいやり捨つべきも

三 をりふしのうつりかはり

腹ふくるゝ、わざ、かいやり捨つべきもの
取りあつめたる事
水鶏のたゞく
六月晦日の大祓
陰曆四月八日
賀茂祭。四月の中の酉の日
陰曆四月八日

をさく
大かた

のなれば、人の見るべきにもあらず。
さて冬枯の景色こそ、秋にはをさく、劣るまじけれ。汀の
草に紅葉の散りと、まりて、霜いと白う置けるあした、遣水
より烟の立つこそをかしけれ。

年の暮れはて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれ
なる。すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める
二十日餘りの空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前(二)の使立つ
などぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎ
に取重ねて催し行はる、様ぞいみじきや。

追儼(三)より四方拜に續くこそ面白けれ。晦の夜いたう闇き
に、松どもともして、夜半過ぐるまで、人の門叩き走りありき
て、何事にかあらんことくしくの、しりて、足を空に惑ふ

はつしきもの
無事ふあり

(一)十二月十九日
より二十一日
まで三日間宮
中に行はれし
佛事。

(二)十陵八墓に幣
帛を奉られし
使。

(三)十二月晦日に
行はれし鬼や
らひ。

が、曉方よりさすがに音なくなりぬること、年の名残も心細
けれ。亡き人のくる夜とて、魂祭るわざは、此の頃都には無き
を、あづまの方には尙する事にてありしこそあはれなりし
か。かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えね
ど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま松立てわたして、
花やかに嬉しげなるこそまたあはれなれ。——徒然草——

四 ワイマールより 藤代禎輔

ワイマールは小さな都にて、山水の景勝に富めるにも
これ無く候へども、如何にも閑靜にて人氣良く、誠に居心地
よき所に候。公園には森の繁れる中を、イルムといふ瀧(一)の川
位の流ちよろしく、致居、其の上には鐵の欄干に石柱といふ

(一)Tham.
二東京市の北郊
王子町にある
細流。

厳しき橋も有れど、又丸太を組合せて架けたる風流なる橋もありて、シルレルの腰掛とか、ゲーテの休息小屋とか、何れも普通り保存せられて、古を偲ぶ跡到る處に散在致居候。一委しく點檢して詩作との關係など取調べ候はゞ、餘程興



像 アーゲ
(藏館書圖ルーマイワ作ルベツリト)

味ある事ならんが、短日月の滞在にては夫も出來かね候まゝ、通り一遍の旅客として、目に觸れ候處を御報申上候。

今日第一番に足を運びたるは圖書館に候。此の圖書館は、初はゲーテが我が書齋にとて自ら設計したる建築の由、珍書奇籍も夥しく、ゲーテ、シルレルをはじめ有名なる人物の彫像、肖像畫など、貴重品の數

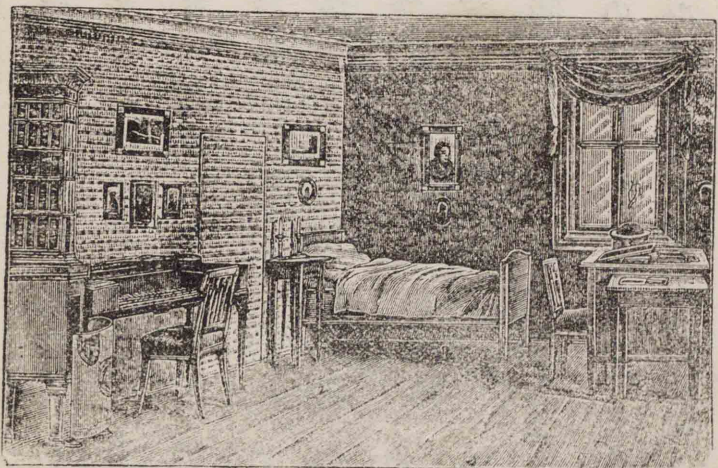
(1) Alexander
Tippel
獨逸著名の彫
刻家(西曆一
七四一—一七
九三)
(2) Apollo
希臘羅馬の神
話中重要な神
の名。
(3) Johann
Heinrich von
Danneberg
獨逸著名の彫
刻家(西曆一
七五八—一八
四一)

數ありて、今まで文學史の挿畫にて纔かに其の倂を偲び居たる名作の實物に接し、トリッペルが靈腕に彫まれたるアポロ其の儘との評あるゲーテが大理石像、ダンネベルグが妙技を揮ひしシルレルの半身像など、凝然見惚れて案内者に急きたてられ、不承々々歩を移すといふ始末、儘になるなら何時までも此處に居て、朝夕此等の逸品を眺めたしとの念も起り候。圖書館を出でて、シルレルの住宅を音づれ候。表よりの見附きはさして立派といふ建物にはこれ無く候へども、窓の板戸が綠色に塗立てある様など、何と無くゆかしき心地せられ候。中に入りて一階二



像胸ルレルシ
(作ルケッネンダ)
(藏館書圖ルーマイワ)

階は梯子段を見しばかり、三階に至りて應接室、書齋、臨終室を一覽致候。一切の裝飾品を取除けて、詩聖が使ひ慣れし文



神來の筆

房具、椅子、寢臺、掛額等を据附けあるばかりなれば、至つて質素に候へども、此の内に起臥して晩年の傑作を産出し、現場かと思へば、感慨限り無く、腐れ林檎の香を嗅ぎて深更まで意匠を凝したるは此の机の前にや齋あらん、嗅煙草に睡魔を驅りて神來の筆を馳せたるは彼の窓の下ならんなど、詩人ならぬ我

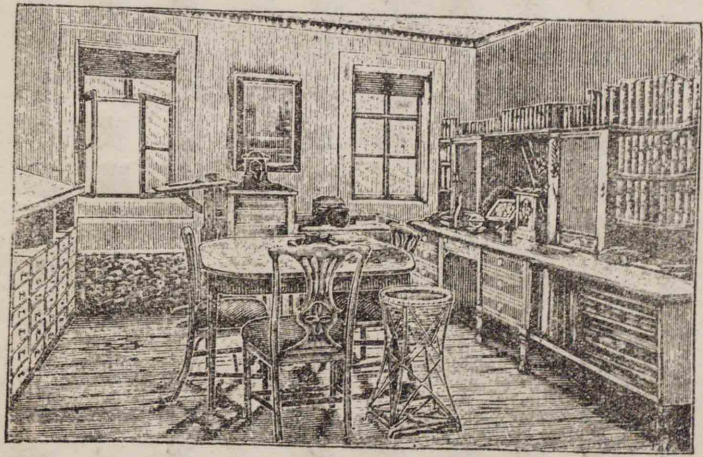
が身も空想の天地に馳往きて、案内者の饒舌も耳に入らず候。臨終室を見るに及びて其の餘りに狹隘なるに驚き、かゝる偉人が此のむさくろしき部屋にて息を引取りたるかと、坐ろに暗涙に咽び候。

此處を立出で、國君の墳墓に詣で候。これはワイマール時代の君主の遺骸を納むる圓天井の石室にて、ゲート、シルレルの棺も此の裡に安置せられ、木棺の上部は月桂樹の葉にて堆く蔽はれ、ゲートの頭部には金製、シルレルのには銀製の月桂冠を供へあり候。兩詩人の優劣は存命中よりとかく議論ありて、ゲート自身も、強ひて一人に團扇を上げずとも、是程の詩人を二人まで出したりと獨逸國民は喜ぶべき筈なるを、「といひたる位なるが、今此の金銀の差別を見て、勿論

両詩人の地位若しくは逝去當時の事情に依るとはいへ、シルレルは死後まで薄倅なりきとの感を起し候。併し身を布衣に起して、王者と共に同一石室に葬らるゝは比類無き名譽とも申すべきか。感歎の餘り、両詩聖の棺の上なる月桂樹の葉數葉を摘取り、記念にとて持歸り候。

これよりゲーテの住宅に赴きしが、さすが宰相の地位にありて當代に時めきし詩人のこととて、シルレルの居宅などと

時めく



齋書のテ—ゲ

Jena.
獨逸サクセ.
ワイマールの
首都。
Wurzbourg
獨逸ハヴアリ
府。王國の都

は比較にならぬほど廣大なるものなれども、現今の程度よりいへば、極めて質樸にて、是亦案外の感に打たれ候。ゲーテの寢室に入りて、シルレルが臨終の際ゲーテも病蓐に就き居りしかば、家人はシルレルの死を告げなば、病氣に障りなんとて秘しけれど、素振に覺りて其の實を察し、潛然流涕したりとの一事を思ひ浮ぶれば、両詩聖の交情は東西古今に例無く美しきものなりけりと、感涙禁め難く候ひき。

ワイマール見物も一通り相濟みたれば、明日此の地を發足致し、^(一)イエナを経てウルツブルグに赴くつもり、行く先々の模様は追々御通知申上ぐべく候。

—帝國文學—

五 晩春の別離

島崎 藤村

時は暮行く春よりぞ
 恨は友のわかれより
 君を送りて花ちかき
 緑に迷ふうぐひすは
 しろき光は佐保姫の
 これより君は行く雲と
 おもへば琵琶の湖の
 ひがし膽吹の山高く、
 日は行通ふ山々の
 いかにも勝れし想をか
 ながれは空し、法皇の

また短きはなかるらん。
 更に長きはなかるらん。
 高樓までも来て見れば、
 霞空しく鳴きかへり、
 春の車駕をてらすかな。
 ともに都を立出でて、
 岸の光にまよふとき、
 西には比叡、比良の峰、
 深きながめを伏仰ぎ、
 沈める波に湛ふらん。
 夢はるかなる鴨の水、

佐保姫の春
の車駕

(一)白河法皇。

水にうつろふ山城の
 かすめる姿見盡して、
 鈴鹿の山の波とほく
 いかによろづの恨をば
 春去行かば、青によし
 としつき君が戀慕ふ
 古き藝術の花の香の
 いかにも韻を身にしめて、
 さては秋津の島が根の
 めぐりて進む黒潮の、
 天際とほく白き日の
 目に遙かなる遠海の

みやびの都行く春の
 畿内に迫る伊賀、伊勢の
 海に落つるを望む時、
 空行く鷺に窮むらん。
 奈良の都に尋ね入り、
 御堂のうちに遊ぶ時、
 伽藍の壁に遣りなば、
 ふかき思に沈むらん。
 南のつばさ紀の國を
 鳴門に落ちて行く處、
 光をもらす雲裂けて、
 波のをどるを望む時、

狹霧

いかに胸打つ音高く	君が血汐の騒ぐらん。
または名に負ふ歌枕	波に干とせの色映る
明石の浦の朝ぼらけ	松萬代の音にひやく
舞子のはまの夕間暮	若しそれ海の雲落ちて、
淡路の島の影くらく、	狹霧のうちに鳴きかよふ
千鳥の聲を聞く時は、	いかに浦邊にさすらひて
遠き昔をしのぶらん。	
げに君がため山々は	雲を停めん、浦々は
磯にながる、白波を	揚げんとすらん。よしさらば、
旅路遙かに野邊行かば	野邊のひめ琴、森行かば
森のひめ琴探りもて、	高きに登り、あめつちの
もなかに遊び、大川の	ながれをきはめ山々の

朽ちせぬ琴

神をもよばひ、谷々の	鬼をもおこし、歌人の
魂をも遠く返しつゝ、	涼しき聲を打揚げて
朽ちせぬ琴を搔鳴せ。	
さらば名残は盡きずとも、袂をわかつ夕間暮、	
見よ影ふかき欄干に	煙をふくむ藤の花。
北行く雁は大空の	霞に沈み鳴きかへり、
彩なす雲も愁へつゝ	君を送るに似たりけり。
あゝ何時か又相逢うて	もとの契をあたゝめん。
梅もさくらも散果てゝ	すでに柳は深みどり、
人はあかねど、行く春を	いつまで此處に留むべき。
われに惜しむな、家苞の	一枝の筆の花の色香を。

藤村詩集

六 平家雜感

高山林次郎

一 都 落

凡そ世の中に傳へ遺されし歴史は多かれど、平家の都落ばかり、哀れにもまた目覺しきは無かるべし。

(一) 治承四年十二月、平重衡、父清盛の命を、受けて奈良東大寺興福寺を焼く。
(二) 養和元年三月、重衡等、源行家を尾張國墨股に討つて、大いに之を破る。
(三) 養和元年、平氏廢る。義仲に破らる。
(四) 壽永二年七月、義仲延暦寺に據る。
(五) 一、み吉野の山のあなたが宿うがな、身のうき時のかくれ家にせん。
(六) 壽永二年七月、義仲を避けて平氏西海に走る。

南都の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬨尙響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち満ちぬ。宇治、淀の備もろくも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。哀れ一門の天下身を置くに處なし。世はかく憂きに、み吉野の山のあなたに隱家は無きか。いざさらば己みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國のみゆきに、一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死も知らぬ別路に、人のあはれの限りもなう、復歸り來べき都としも思はねばにや、六波羅、池殿、西八條以

一炬の煙となす

鳳闕 椒房

(一) 「ふるさとを焼野が原とかへりみて、末も煙の浪路をぞ行く。」(平家物語、平經盛)

翠華搖々

身にしむ秋は欺かれず

下一門譜第の邸宅宿房、京白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となし果てぬることあわたしかりしか。

こゝに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜々悲しむ。保元此の方、天下の榮華を盡したる花の都のふるさとを、焼野の原と顧て、末は煙の浪路をば、行方も知らずさすらふらん。直衣束帯の身にも、今は黒金の衣を着けたれども、誰かは詠歎の餘哀になれて、弓矢の響を勵むべき。さても捨て難き命や。今こそは憂世なれ。さすがにしのぼる、昔の様の夢に入るをば如何にせん。翠華搖々として西に向へば、秋風到る處野に満てり。嗚呼、昨日は東關のもとに轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂に宿る月の影

(一)平清經

いづれか心を傷ましめざる
べき。月の出づる山の端を、あ
なたの空とやおぼしけん、日
暮舳に笛吹く人あり、響は遠
く煙波をかすめて、三軍ひと
しく耳を欵つ。嗚呼、此の時此
の人、想果して如何。

二 清盛入道

世にも哀れなるは平家と
ぞいふめる。げに此の一門の
盛衰を考ふるに、心も詞も及
び難きなり。



平家春日
現權日春

梭をかふ

(一)平忠度

案ずれば、一旦の榮華に耽
りて、百年の計を思はず、今や
秋の嵐の吹荒ばんずる朝も、
春の夜の夢なほ朧にして、覺
めての後はさすがにうき世
と觀ずれども、先世、後代既に
梭をかへたるをいかにすべ
き。今を昔に反さんすべもか
た絲の、よりくづれたる世こ
そ、返すくも是非なけれ。
されば風雅にかくれては、
一題の遺詠に今生の本懐を



都落
驗記繪卷

(一)平維盛。
なかくくに

終へ、恩愛にほだされては、己身の現在に來世の果報を思はず。哀れは桐の一葉に散初めて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば怪しきまでに哀れなりける運命かな。
さるにても入道相國の生涯こそ、なかくにおもしろかりけれ。

攝録
成敗

弓矢のいさをしはや畢んぬ。朝家の權柄今はた盛なり。一門殿上に昇りて六十餘人、私封全國に亘りて三十餘州、攝録の家は名のみにて、四海の成敗皆こゝに集れり。昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今は「此の人ならでは人にあらず」と唱へられ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏これが爲に目を欷つるばかりなり。されば十善の帝王畏くも外戚の威におされ給ひて、八幡、賀茂の御幸は、八重の潮路の巖島

十善の帝王

卿相雲客

(一)治承四年福原遷都。
(二)平安京。當時の落首に「百年を四かへりまで、すき來りにし、愛宕の里の荒れや、平家物語」(平家物語)
(三)重盛の子。平家没落の前、後山に上り、高野寺の時を知らず。(一八二〇)



とぞ觸れられける。なにがしの卿が「入る日をも招きかへさんずる勢」と書かれしも、げにことわりとぞ覺ゆる。
不敵なる入道は、私門の榮に飽きたらで、世に人もなげにふるまはれけるこそゆゑしけれ。ここに卿相、雲客、流離の難に遇ふもの。清四十餘人、法皇の御身を以てすら、城盛南の離宮に射山の嵐をしのばせ給ふ。中にも重代の帝座俄に動きて、愛宕の里の哀れをとめけるこそ、なかくにあさましかりしか。

咲きも残らず散りも始めぬ櫻花、嵐なくともかくてやはやむべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の

錦の直垂に萌黄匂の鎧着て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀帯佩こそ、あつばれ平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の水禽に算を亂し、十萬餘騎は、徒に長き世の笑をとゞめたるに過ぎず。加ふるに北土俄に雲亂れて、木曾の山氣漸く都に逼り、兩山の衆徒亦既に反覆の色を示しぬ。平家の運命日に益、急なり。

時しも入道は病に罹りぬ。哀れ病の床の寂しきに、霜夜の鐘の響の闇の底に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至るまで、三十餘年の過去を靜かに憶ひ出でたる時、而して命の際の身ぞと觀じたる時、彼果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身に餘りて、保平のいさを又言ふに足らずと思はざりしか。己につらかりし人々を、かくまでに惱まし

恩愛の絆

六慾

欣求

しことの罪深かりきとは思はざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしはては、軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせし事の中にも非道の所行なりしを思はざりしか。更に小松の内府が、身命にかへて、乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆にうたゝ悔恨の心を動かすこと無かりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を棄て、未來の淨樂を欣求する一念を發すること無かりしか。皆あらず。入道は死に至るまで其の初念を翻すことなく、正に其の生けるが如くにして死せしなり。

今はの詞にいはいはく、兵衛佐頼朝の首を見ざりつるこそ、返す返すも遺憾なれ。われ死したりとて、佛事孝養をもすべか

三世の因果
ごまれかく
まれ

らず、堂塔をも建つべからず。急ぎ討手を下し、彼が首を刎ねて我が墓前に懸けよ。これぞわれに對しての今生、後世の孝養にてはあらんずる。」と一念の執着に、必衰の運命をもつともせず、三世の因果を身にひくとも、なほ怨敵に報いんことを必せり。其の事の可否はしばらく措き、とまれかくまれ、丈夫たる心の強きは感すべきなり。たとひ四海の波を翻して彼が頭にそぐとも、なほ此の一我をいかにともすること能はざらん。六尺の眇軀こゝに至れば天地の大にも比ぶべく、運命われに於て浮塵にひとしからん。いはゆる死して而して生けるものといふべきか。

——楞牛全集——

眇軀
一我

七 扇の的

さる程に阿波、讃岐に平家に叛きて源氏を待ちけるつはものども、あそこの嶺、こゝの洞より、十四五騎、二十騎打連れ打連れ馳來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。けふは日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引退く所に、沖より尋常にかざつたる小舟一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、舟を横さまになす。あれはいかにと見る所に、舟の中より年のよはひ十八九ばかりなる女房の、柳の五つぎぬにくれなるの袴着たるが、皆くれなるの扇の日出いたるを、舟のせがいに挟み立て、陸に向ひてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、「あれはいかに。」と宣へば、射よ

尋常にかざ
る
五つぎぬ
舟のせがい

矢おもて
けいせい
てだれ

小兵

いろふ

とにこそ候らめ。但し大將軍の矢おもてに進んで、けいせい
を御覽ぜられん所を、てだれに狙うて射落せとの謀とこそ
存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん。」と
申しければ、判官「みかたに射つべき仁は誰かある。」と問ひ給
へば、てだれども多う候なかに、下野の國の住人那須の太郎
資高が子に、與一宗高こそ小兵には候へども、手はきいて候。
と申す。判官「證據があるか。」さん候。かけ鳥などをあらそうて、
三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官「さらば與一
呼べ。」とて召されけり。

與一其の頃は、いまだ二十許の男なり。襦に赤地の錦をも
つて、おほくび、はたそでいろへたる直垂にもよぎ緘の鎧着
て、あしじろの太刀を佩き、二十四さいたるきりふの矢負ひ、

一定

仔細を存ず

御説

うすきりふに鷹の羽わり合せてはいたりけるぬだめの鏑
をぞさし添へたる。重籐の弓脇にはさみ、冑をば脱いで高紐
にかけ、判官の御前にかしこまる。判官「いかに與一。あの扇の
眞中射て、かたきに見物せさせよかし」と宣へば、與一「つかま
つつとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方
の御弓矢のきずにて候べし。一定仕らうずる仁に、仰せつけ
らるべうもや候らん。」と申しければ、判官大きに怒つて、「今度
鎌倉を立つて西國に向はんずる者どもは、みな義經が下知
を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これよ
り疾うく鎌倉へかへらるべし。」とぞ宣ひける。與一重ねて
辭せば、悪しかりなんとや思ひけん。「さ候は、外れんをば存
じ候はず。御説で候へば、仕つてこそ見候はめ。」とて御前をま

かり立ち、黒き馬の太く逞しきに、まろほやすつたる金覆輪の鞍おいて乗つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。

身方の兵共、與一が後を遙かに見送つて、此の若者一定仕らうずると覺え候。と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。矢ごろ少し遠かりければ、海のなか一段ばかり打入つたりけれども、なほ扇のあはひは七段ばかりもあるらんとこそ見えたりけれ。頃は(一)五月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折ふし北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげ、ゆりすゑて漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家船を一めん(二)に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べて之を見る。いづれもいづれも、はれ

(一)壽永三年。

くしに定まらず

はれならず
といふこと
なし

ならずといふことなし。與一目をふさいで、南無八幡大菩薩別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り自害して、人に再びおもてを向ふべからず。今一度本國にかへさんと申し召さば、此の矢外させ給ふな。と、心の中に祈念して目を見開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなりたりけれ。與一鏑を取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふでう、十二束三ぶせ、弓は強し、鏑はうらひやく程に長なりして、あやまたず扇の要際一寸許おいて、ひいふつとぞ射きつたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ揉れて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の日出

よつびいて
ひやうと放
つ

ひいふつと
一もみ二も
み

どよめく

いたるが、夕日にかゝやくに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ
ゆられけるを、沖には平家舷をたゞいて感じたり。くがには
源氏箆をたゞいてどよめきけり。

—平家物語—

(一)後白河法皇。
(二)山城國愛宕郡。

八 大原御幸 其の一

夜をこめて
御幸なる

法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住
居御覽ぜまほしうは思し召されけれども、衣更着、彌生の程
は嵐烈しう、餘寒もいまだ盡きせず、嶺の白雪消えやらで、谷
のつらゝも打解けず。かくて春過ぎ、夏來つて、北祭も過ぎし
かば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸な
りけれども、供奉の人々には徳大寺、花山院、土御門以下公卿
六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通の御幸なりけれ

(一)平安朝の歌人。延喜頃の
人。
(二)山城國愛宕郡。
(三)後冷泉天皇の
中宮。關白藤
原教通の女
御名歎子。
夏草の茂みが
未

薨破れては
霧不斷の香
を焼き、扉
落ちては月
常住の燈を
掲ぐ

(四)夏山の青葉
まじりの遅
櫻、初花より
もめづらしき
かな。(金葉
集藤原盛房)

ば、彼の清原の深養父が補陀落寺、小野の皇太后宮の舊跡叡
覽あつて、それより御輿にぞ召されける。遠山に懸る白雲は、
散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ
惜しまるゝ。頃は卯月二十日餘りの事なれば、夏草の茂みが
末を分入らせ給ふには、はじめたる御幸なれば、御覽じなれた
る方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られて、哀れなり。
西の山の麓に一字の御堂あり、すなはち寂光院これなり。古
造りなせる泉水、木立よしあるさまの所なり。薨破れては
霧不斷の香を焼き、扉落ちては月常住の燈を掲ぐとは、かや
うの所をや申すべき。庭の若草しげりあひ、青柳糸を亂りつ
つ、池の浮草波に漾ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松
にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初

花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを叡覽あつて、かくぞ遊ばされける、

池水にみぎはの櫻ちりしきて

波の花こそさかりなりけれ

ふりにける岩の絶間より落ちくる水の音さへふるびて、よしある所なり。綠蘿の垣、翠苔の山、繪にかくとも筆も及び難し。さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦、薺這ひかり、しのぶまじりの忘草、瓢箪屢空し、草顔淵が巷に滋し、藜藿深く鎖す、雨原憲が樞を濕すともいひつべし。杉のふき目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影にあらそひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山前は野邊、いざさを笹に

綠蘿の垣翠苔の山

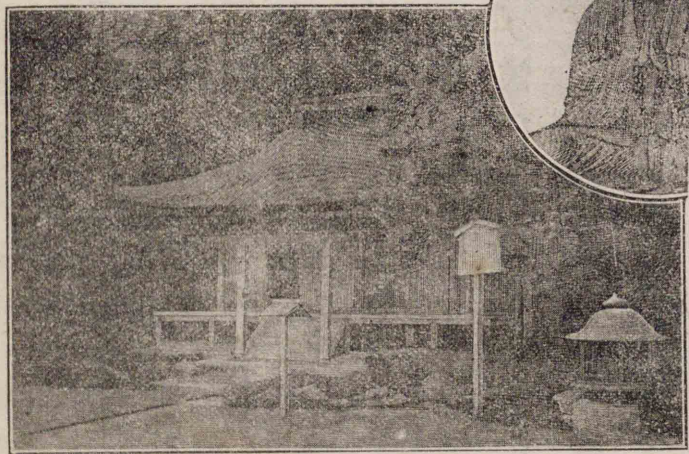
瓢箪屢空し。草顔淵が巷に藜藿深く鎖す。雨原憲が樞を濕すともいひつべし。杉のふき目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影にあらそひて

洩る月影にあらそひて

間遠に結へるませ垣

まさ木のかづら、青つづら、稀なる所なり

寂光院本堂



建禮門院木像

風さわぎ、世にたぬ身のならひとて、うきふししげき竹柱、都の方の言傳は、間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとは、峯の木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これらが音づれならでは、まさ木のかづら、青つづら、くる人稀なる所なり。

法皇「人やある、人やあ

る。』と召されけれども、御應へ申す者もなし。や、あつて老衰へたる尼一人参りたり。女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。』と仰せければ、此の上の山へ花つみに入らせ給ひて候。』と申す。『さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉る人もなきにや、御いたはしうこそ。』と仰せければ、此の尼申しけるは、『五戒十善の御果報盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行になじかは御身を惜しませ給ひ候べき。因果經には、『欲知過去因、見其現在果。欲知未來果、見其現在因。』と説かれたり。過去未來の因果をかねて悟らせ給ひなば、つやく御歎あるべからず。むかし悉達太子は十九にて伽耶城を出て、檀特山の麓にて、木の葉を連ねて肌をかくし、峯に上つて薪を採り、谷に下つて水を掬ひ、難

五戒十善
捨身の行

つやく

成道正覺

行苦行の功によつて、終に成道正覺し給ひき。』とぞ申しける。此の尼の有様を御覽ずれば、身には絹布の分ちも見えぬものを結び集めてぞ着たりける。あの有様にても、かやうの事申す不思議さよと思し召して、『抑、汝は如何なる者ぞ。』と仰せければ、此の尼さめく、と泣いて、しばしは御返事にも及ばず。

さめく

九 大原御幸 其の二

や、ありて涙をおさへて、『申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申す者にて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程思ひ知られて、

(一)藤原通憲。鳥羽崇徳、近衛の三朝に歴仕す。

忍びあへぬ
さよ

今更せん方なうこそ候へ。とて袖を顔に押當て、忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇げに汝は阿波の内侍にこそあなれ、御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、たゞ夢とのみこそ思し召せ。とて御涙せきあへさせ給はず。供奉の公卿、殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ、各感じあはれける。

來迎の三尊
八軸の妙文

さてかなたこなたを觀覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつゝ、外面の小田も水越えて、しぎ立つ隙も見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて觀覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並びに先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置

蘭麝の薰
一維摩詰のこ
と。釋迦と同
時代の人。

かれたり。蘭麝の薰に引きかへて、香の烟ぞ立ちのぼる。かの淨名居士の方丈の室の内に、三萬二千の床を並べ、十方の諸佛を請じ給ひけんも、かくやとぞ覺えける。障子には諸經の要文ども色紙に書いて、ところどころにおされたり。其の中に大江の定基法師が、清凉山にして詠じたりけん、笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前。とも書かれたり。少し引きのけて、女院の御歌とおぼしくて、

思ひきや深山の奥にすまひして

雲居の月をよそに見んとは

さてかたはらを觀覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の御衾などかけられたり。さしも本朝漢土の妙なるたくひ敷を盡し、綾羅錦繡の装さながら夢にぞなり

今の様に覺えて

花がたみ

申しもあへず
せきあへず
見え参らす

にける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の人々も、まのあたり見奉りし事ども、今の様に覺えて、皆袖をぞ絞られける。
や、ありて上の山より濃き墨染の衣着たる尼二人、岩のかけちを傳ひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇「あれはいかなる者ぞ」と仰せければ、老尼涙を押へて「花がたみ臂にかけ、岩つゝ、折具して持たせ給うて候は、女院にてこそ渡らせ給ひ候なれ。つま木に蕨折添へて持ちたるは、鳥飼の中納言維實の女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言の典侍の局」と申しもあへず泣きけり。法皇もあはれげに思し召して、御涙せきあへさせ給はず。女院は世を厭ふ御習とはいひながら、今かゝる有様を見え参らせんずらん耻づかしさよ、消えも失せばやと思し召せども、かひぞなき。宵々

關伽の水

攝取の光明
聖衆の來迎

毎の關伽の水、掬ふ袂もしをるゝに、曉おきし袖の上、山路の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へもかへらせ給はず、又御庵室へも入らせおはしませ給はず、あきれて立たせましましたるところに、内侍の尼参りつゝ、花筐をば賜はりけり。世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。早々御見参ありて、還御なし参らせ候へ」と申しければ、女院御涙を押へて、御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かなとて、御見参ありけり。

— 平家物語 —

一〇 仁は心のいのち 室 鳩 巢

心に仁あるは、人に元氣あるが如し。人の元氣は脉に現れ、

一〇 仁は心のいのち

究

齒徳
遜讓

心の元氣は愛に現る。脉の通ひ絶ゆれば人死する如く、愛の理滅ぶれば心死する程に、仁は心のいのちとも申すべし。それ心は活物なるにより、人に情あり、物の哀れを知りて、常にいきたる物ぞかし。よりて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長を見ては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒徳を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞いては必ず感ずる事を知り、不義を聞いては必ず耻づる事を知る。もし情なく哀れを知らずば、其の心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さも知らずなりなん。何をもて自愛し、何をもて恭敬せん。義を聞いて感ずる事なく、不義を聞いても耻づる事なかるべし。是をもていふに、仁義禮智いづれも心の徳にして、各その理分るれども、其の本源は仁に外な

(一)豊臣時代の武
將佐野了伯の
こと。慶長六
年(一六二六)
歿。年四十四。

雨雫と泣く

らず。人として不仁なれば、義も、禮も、智も其のさまあり其の用ありといへど、所詮内より生ぜねば、眞の徳にあらず、公の理にあらず。其につきて、一つの物語こそ候へ。相州北條の幕下、佐野の城主天徳寺、豪健の勇將なりしが、或時琵琶法師を招きて、平家を語らせて聞きけるに、未だ語らぬ先に琵琶法師にいひけるは、「某はたゞあはれなる事を聽きたくこそあれ。其の心得して語り候へ。」といへば、法師「心得候。」とて、佐々木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天徳寺あはれがりて、雨雫と泣きけり。さて「今一曲前の如くあはれなる事を聽きたし。」といへば、那須與市宗高が扇の的を語りけるに、平家半ばより、天徳寺また落涙數行に及べり。後日に家臣の輩に、「過ぎし日の平家はいかゞ聽きつる。」といふに、家臣ども「最も

面白き事にて候。但し我等ども一つ心得ぬ事こそ候へ。前後二曲ともに勇烈なる事にて、あはれなる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候。是はいかゞの事にて候にや、今に不審なる事にいつれも申し合ひ候。」といへば、天徳寺驚きて、「只今までは各を頼もしく思ひ候ひしが、今の一言にて、さてく、力を落して候。まづ佐々木が先陣をよく合點して見られ候へ。頼朝、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生暖を高綱に賜はるにあらずや。されば其のかひもなく、此の馬にて宇治川を先陣せずして、人に先をこさねば、必ず討死して再び歸るまじと、頼朝に暇乞して出でける、其の志を察して見られよ。あはれならぬ事かは。」とて、しばしば涙を拭ひつゝ、しばしありて言ひけるは、「那須與市も

武邊

大勢の中より選ばれて、只一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乗入れて的に向ふに至るまで、源平両家鳴りを静めて是を見物するに、もし射損じなば、身方の名をれたるべし。馬上にて腹かき切つて海に入らんと覺悟したる心を、察して見られ候へ。武士の道程あはれなる物は候はず。某は毎に戰場に臨みては、高綱、宗高が心にて槍を取り候故、右の平家を聽く時も、兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに、各にはあはれになかりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊は、唯一旦の勇氣にまかせて、眞實より出づるにてはなきにやと思はれ候。それにては頼もしくならずこそ候へ。」と言ひしかば、諸臣皆迷惑して、辭なかりしとなり。是天徳寺が武邊は、涙より出づれば、もとより仁者にはあらねど、武の一筋は

迷惑す

惻隱

仁に根ざして、惻隱の心より發するにあらずや。然るに武は殺獲の事にて、手荒き道なれば、いはゞ仁とは黑白のたがひあるやうなれども、仁より出でざるは、眞の武にあらず。況や其の餘の事は、なほもて知るべし。されば忠孝も禮儀も、文道も武道も、内より油然として潤ひわたりて發するにあらずば、眞のものにあらず。これ則ち前にいひし人に情あり物の哀れを知るの心なり。すべてもろくの言行ともに、義理に當りてはことごとく忍びざるの心より出でて、天徳寺が涙をこぼすやうにだにあらば、是心徳の全きなり。仁者といはん、に何の疑かあるべき。

—駿臺雜話—

一一 皇太子殿下御成年の大典を祝し奉る

大隈重信

芳草甘雨に長じ、緑樹祥風を扇ぐ。

(一)大正八年五月

春宮

端無く

不基を肇む

僂指に勝へず

芳草甘雨に長じ、緑樹祥風を扇ぐ。此の月七日の佳辰を以て、畏くも宮中にては春宮御成年の式典を舉行あらせられる。億兆誰か欣躍せざらん。茲に端無く憶ひ起すのは、皇祖皇宗不基を肇め、列聖相繼承し給へる我が三千年の帝室が、其の國民を撫育せさせらるゝ無疆の御仁徳である。世界何れの國か興廢無からん。古來國を成すもの僂指に勝へないが、其の存して今日に至るものは一もない。有るは唯地理的空名である。國家の壽命は長きも十世、廿世、卅世に過ぎず、短きは三世、二世、一世で終つて居る。しかも其の間も互に權力を争ひて攻伐止む無く、殘忍酷薄、人を殺し、財を奪ふ事其の數

一起一仆

天佑

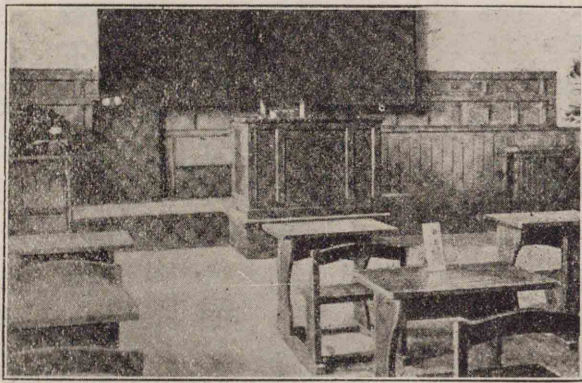
未來永劫

を知らず。人類の禍何者か之に過ぎよう。固より或觀察よりすれば、競争は進歩の母ともいふ。文明はかゝる悽慘なる一起一仆の中より磨礪されるとも言へるか知らぬが、唯それ世界に千載の國無きを如何せん。日本帝國は獨り此の間に存して、唯一無二のものである。之をしも天佑と謂はん歟。天佑は更に我が國に嘗て暴君の現れまさぬ一事である。是有るが故に、我が皇室は過去の三千年は言ふもおろか、未來永劫に天地と共に無窮なるべき泰運を有せらるゝのである。實に我が帝室は吾人國民の名譽の源泉たると共に、又道德の源泉であらせられる。是空言に非ず、誇張に非ず、歴史的事實が何よりも昭明較著に之を物語つて居る。

併しながら四時には風雨無くんば非ず。如何に天日嗣は

日月と悠久を競ふ

式微



室教御下殿子太皇るけ於に院習學
(机御はるて立の札)

連綿たるも、長い間には遠い御血統は存しても、近い御血統は動もすれば縷の如く危き事が有つた。皇統は是非とも一系絶えず、日月と悠久を競はねばならぬ。勿論金枝玉葉いと繁茂せさせ給ふ御事として、萬一の場合には支流より大統を繼がせ給ふであらうが、正系の斷絶は一大不祥事である。けれどもありし昔の皇室式微の御時には、權臣の政略の爲に、其の御結婚は御自由ならず、數多の皇子女あらせられても、僅かに親王家の外は、殆ど御結婚が叶はせられなかつた爲に、

歸依門跡

(一) 第一百十八代。東山天皇の曾孫、閑院宮典仁親王の第六子。
 (二) 東山天皇の皇子直仁親王より出づ。
 (三) 光格天皇の第三子。
 (四) 第一百二十代。仁孝天皇の第四子。
 (五) 稚瑞照彦尊。

蚤世

宸襟を惱ます
 愁眉を開く

畏けれども皆佛門に歸依遊ばされ、爲に京都邊には宮門跡が多く有らせられた。是は實に天日嗣の上に憂慮し奉るべき危険事である。古き例は搦き、光格天皇は近い御血統なる親王の家閑院宮より入りて大統を繼がせられたが、仁孝天皇も孝明天皇も、共に皇子はみな御一方であらせられた。即ち危いことには、明治天皇は實に孝明天皇の一有りて二無きいと尊き御血統で在らせられたが、此の天皇にまづ皇子が御降誕と思ひきや、御蚤世遊ばし、其の後は暫く皇女のみで、皇子の御誕生が無かつた。先帝には御自らの御爲のみならず、皇祖皇宗に對せらるゝ御孝思の上からも、如何ばかり宸襟を惱ませ給ふかと恐察し奉り、國民も共に愁眉を開き得なかつたが、これこそ皇宗の御遺徳とも、將御冥護とも

(一) 明治十二年八月三十一日。明御名嘉仁。明治二十二年皇太子に立たせられ、大正元年七月三十日御踐祚。
 五内調はず

二豎
 (三) 御名裕仁。明治三十四年四月二十九日御誕生。迪宮と稱し奉る。

(四) 雅仁親王。明治三十五年六月二十五日御誕生。淳宮と稱し奉る。
 (五) 宣仁親王。明治三十八年一月三日御誕生。光宮と稱し奉る。

(六) 崇仁親王。大正四年十二月二日御誕生。澄宮と稱し奉る。

申すべきか、遂にまた皇子が御降誕になつた。これぞ畏くも今上陛下に渡らせられるが、しかも初の程は五内調はせられず、一時は御將來を案じ奉つた程であつたが、御健康は御成長と共に加らせ給ひ、遂に御成年に及んで御婚儀にまでなつたのである。けれども之を祝し奉る萬民の心胸には、猶晴天に一朶の殘雲を氣遣ふ如き不安を止めて居たが、是をや天佑とも申すべきか、爾來御體質は愈々強壯に進ませ給ひ、全く二豎を遠ざけさせられて、第一皇孫が御降誕になつた。宮中の其の時の御喜の程は、恐察し奉るに餘り有る。それより第二第三皇孫と先帝御在世中に御降誕あらせられ、更に先帝崩御の後に、第四皇子が御降誕になつた。而して特筆すべきは、中古以來の久しき習例として、皇子女は多く母胎を

(一)御名は節子。
九條道孝公の
第十四女。明治
十七年六月二
十五日御生
誕。三十三年
御入輿。

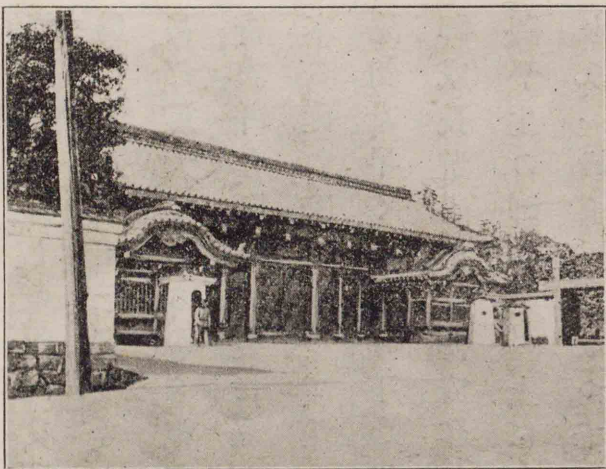
微臣

典侍等に假らせ給うたのであるのに、此の度はかくまで數
多の諸皇子が、皆皇后陛下の御所生に渡らせられ、同じ御宮
殿に御兄弟御睦まじく養はれ給うた御事である。今や時代
の進運は九重雲深き御邊より御光輝を發し、かゝる祥瑞を
眼前に拜し奉る事は、微臣の感喜措く能はざる所である。

妖雲

尙茲に回頭一思すべきは、此の如き御繁榮が、實に我が帝
國の進運と相待つ事である。曩に皇威不振の御時には、皇子
の御誕生も極めて少かつたが、權臣權を棄て、王政復古し、
妖雲散じて天日麗かなるや、宮中の御有様は陰晴一變し、先
帝は畏くも朕自ら身骨を勞し、心思を苦しめ、艱難の先に立
つ。と仰せられて、國家の爲に犠牲的御決意を固めさせられ、
御親ら國家に對する重大なる天職に當らせらるゝ事にな

文化運動



高 輪 御 殿

り、非常に御奮勵遊ばしたが、其の結果は國運に一大發展を
見、而して不思議や是と共に
御子孫は著しく御繁榮遊ば
した。此の御繁榮が實に我が
國家興隆の基である。何とな
れば、我が日本帝國が有史以
來常に帝室を中心とし、帝室
が一切の我が文化運動の本
源であらせられるからであ
る。即ち古代の支那、朝鮮、印度
の文明でも、現代の歐米の文明でも、之を吸收する一切の運
動の中心は悉く帝室であつて、全國民は唯之を圍繞して、大

蟬蛻龍變

善處す

宵衣旰食

儲位

烏兔匆々

盤渦を形づくるものに過ぎぬ。今や世界は一大改造を見んと欲して、其の蟬蛻龍變を急ぎつゝある。而して日本は此の新氣運に善處し、東西兩文明を調和融合して、世界の全人類の爲に永久平和を實現せんとするの理想を有し、其の任務は甚だ重大であるから、叡聖並び無き我が兩陛下には、定めて宵衣旰食、國家の憂に先だつて憂へさせられ居る事と推し奉る。此の際に當つて、第一皇子が己に儲位に立たせられ、烏兔匆々、早くも兩陛下の深き御慈愛の下に、極めて御強健に御成長遊ばして御成年に達せられ、聰明なる御英資が夙に御平生の御學業の上に顯れ給ふといふ事は、兩陛下を初め奉り、一般國民に取つて何たる心強さ、何たるたのもしきで有らうか。

國母

經始
皇謨
恢宏
八荒

既に未來の國母たらせらるべき妃殿下も御内定あらせられた。早晚御成婚の御事も有るべく、隨つてあまり遠からぬ將來に於て、今上陛下の皇孫御降誕の御慶事を漏れ承るの日も有るべきかと信ずる。されば皇運は萬々歳である。而して我が國家の中軸は富嶽と共に搖ぎ無く、我が國民の名譽と道德との源泉は、五十鈴川の流れと共に涸るゝの期有らず。先帝に依つて經始せられた維新の皇謨は、愈恢宏せられて、我が國威は益、八荒に加るに相違無い。微臣は此の意味に於て、獨り我が皇室、我が國民の爲のみならず、普く全人類の平和と幸福との爲に、茲に頓首再拜、謹んで春宮御成年の大典を祝し奉るのである。

一一 川柳

享樂
縦横の機智

背景

川柳は江戸時代太平享樂の民が、縦横の機智を吐出した警句である。形は俳句と同じく十七音から成立つてゐるが、俳句が専ら自然を詠じ、自然を背景として人事を詠ずるに對して、これは人事の觀察を主として、社會の短所や缺點を諷刺する。

米つきをするとは見えぬ春の水

藤棚へ隠元豆が推參し

よつ引いてひやうと放さぬ案山子かな

朝顔も鳴海絞の店を出し

景趣を人化して、輕妙な滑稽を寓したのである。

梅干に餅の戸板をそめ直し

人化す

紹の羽織螢が着るとしまひなり

すりこ木で下女の砧の加勢をし

据風呂に下女がゐる内春になり

四季推移の風流も、日常の人事から觀察すれば、面白みもあり、をかしみもある。

物中に手間をとらせるまつばだか

咽に餅がつまりましたと書いて見せ

玄關番遠吠ほどなあくびをし

笑うたもあとからこけるすべり道

高輪へ出ると忘れた事ばかり

追分は股をひろげて道を聞き

不意に起る懈怠失策些細な行動をも見逃さぬ機警が、思は

ず失笑を催させる。

風呂敷をとけば南瓜と伯母の文
隠居所をねめくかへる里の親

二代目は人のものと左官いひ

あねはひき弟は論語卷の一

大學を教へきらずに越してゆき

明店の右左鍛冶屋に粉屋なり

家賃より高い染ちん着る女房

これ等は人情の微を穿つて、家庭の波瀾も、社會の矛盾も、笑
の中に諷刺せられるのである。

さては信仰の神聖を破つて、

毘沙門は芥子のきいた顔つ付

矛盾

市井

大佛は見るものにして尊まず
観音の千の矢さきに五百うそ
などと茶化してしまふ。

川柳子にあつては、古の英雄豪傑も市井の匹夫匹婦と同
じに取扱はれる。

源三位入齒を嚙んで悔しがり

三保谷が歸りは首に日が當り

清盛は初手は瘡だなどといひ

山伏にたびく化ける源氏方

など、かういふ類も澤山ある。

一門の仇は禪尼の慈悲から出
ひとさかり六十餘州後家差配

などは時代の史論とも見られるであらう。
短簡な語中に深大な教訓を含んで居るのは諺と同じである。諺よりも面白みの多いのは、常に滑稽を伴なつて居るからである。

一三 小品二題

一 春雨

中島廣足

萱ふける軒は、雨の音静かにて、池水のあやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、翅しをれたる鳥どもの、そこはかとなく飛びわたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひとときは心しみぬ。風少し吹出でて、燈火のまたたきたるに、何とも知らぬ花の香の、

ほのかにうちかをりたるなどもをかし。

— 樞園文集 —

二 風鈴

香川景樹

月の晴渡り、花の散行く時々を告ぐる、いとあはれなり。か
の入相、曉うち定めたるたくひならんや。まして水無月の照
る日かげろひて、竹の若葉、松の葉末、そよめき出でし夕暮に
聲あはせたる、物にも似ず。

照る日かげ
ろふ

一四 春夏の句

唐崎の松は花よりおぼろにて

芭

蕉

雲雀より上にやすらふ峠かな

ほろくくと山吹散るか瀧の音

鶯の身をさかさまに初音かな

其

角

蓬萊の松に
たてばや曾
根の松
其角

梅一輪一輪づつのあたゝかさ
わが事と泥鰯のにげし根芹かな
何事ぞ花見る人の長刀
長松が親の名でくる御慶かな
世の中は三日見ぬ間に櫻かな

版部 嵐 雪
の藤 丈 草
向サ 去 來
志田 野 坡
下野 蓼 太

蓬萊の松
たてばや曾
根の松
其角

讀筆角其

春の海ひねもすのたりくかな
菜の花や月は東に日は西に
けるりくわんとして鳥と柳かな
長持に春かくれ行く更衣

蕪 村
山麻 一 茶
井原 西 鶴

さみだれや
ある夜ひそ
かに松の月
蓼太

五月雨をあつめて早し最上川
目に青葉やまほととぎす初鯉
行水の捨てどころなし蟲の聲
夕涼よくぞ男に生れける

芭 蕉
素 堂
鬼 貫
其 角

五月雨をあつめて早し最上川
目に青葉やまほととぎす初鯉
行水の捨てどころなし蟲の聲
夕涼よくぞ男に生れける

讀筆太蓼

子規啼くや湖水のさゝにこり
橋落ちて人岸にあり夏の月
富士一つ埋みのこして若葉かな
石工の鑿ひやしたる清水かな
蘭田刈つて水鶏に遠き寢覺かな

丈 草
太 祇 村
蕪 村
蓼 太

縮圖

標高

平蕪

武藏野の平野を縮圖にした一の盆景を造るとすれば、其處に配置上無くて叶はぬ盆石となるものが此の筑波山である。

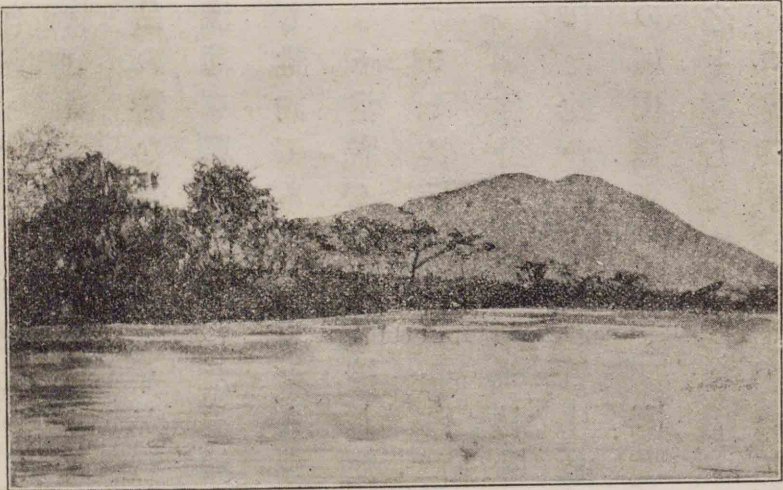
一五 筑波山

河東碧梧桐

武藏野を大約十里平方として、其の二萬五千分の一たる五尺の盆景に筑波を置くとすれば、其の標高二千八百九十二尺は、僅かに一寸一分餘に過ぎなくなるが、全面際涯の無い平蕪の低地であつて、其處に人間の形を置くとしても、僅かに五尺の二萬五千分の一、即ち二絲の高さを保つに過ぎないとすれば、一寸一分の高さもまた巍々として聳ゆるものとなる。殊に其の頂上の男體女體の二峯は、鋭い尖端をなして居り、其の二峯の間には深く刻み込まれた縦谷があり、土

人口に膾炙す

皺皺手法



筑波山

臺が花崗石で築かれた山容は、起伏凹凸の複雑な線味の強硬な皺皺に充ちて居る。蓋し盆景の形式手法上から見ても、殆ど詭向に出来上つて居るものなのだ。

江戸時代の文學者が、富士、筑波と並稱し始めて、それが多くの吟詠の種ともなり、延いては一般の人口に膾炙して、武藏野とは離るべからざる因縁をも生じ、關東第一の名山とも假想

語呂

單純化

- (一) 武藏國南埼玉郡
- (二) 下總國東葛飾郡
- 交錯
- (三) 東京市の北部に接する小丘
- (四) 武藏國南葛飾郡
- (五) 利根川の支流。小利根川ともいふ。
- (六) 隅田川の上流。武藏國秩父郡の山間に發す。
- (七) 武藏國の東部に荒川の支流。隅田川に合す。

さるゝやうになつたのは、事實武藏野の平地に山らしい形
 状を備へたものの無い爲もあらう、又富士、筑波と續ける語
 呂の滑な爲もあらうが、要するに盆栽、插花、盆石等、大自然の
 淺薄な單純化をした遊戯に馴れた眼に、其の配置が如何に
 も詭向であるからだ。人爲的に完成した法則に、何等の紛も
 なく當嵌る自然に接した時、萬衆は擧つて得意の喝采を揚
 げる、それに過ぎないのだ。

越谷野田附近の桃林を綴る菜黄麥綠の上に、霞てぼかさ
 れた此の山を望むのは、必ずしも無味乾燥では無い。又十里
 の稻田黄熟して、一望際涯の無い間に交錯する榛の木(三)の森
 之を壓して立つ此の山と對する道灌山よりの秋晴の趣味
 も亦捨て難い。其の他中川(四)、江戸川(五)、荒川(六)、綾瀬川等(七)の沿岸より

(一) 共に東京市十五區の中。

千里絶人煙
 平夷の眸界

除外例

彷徨す

する茫漠な眺望の中に、一の此の凸起の存するのは、幾分弛
 緩した風致を引締めるものともならう。が、それは寧ろ主た
 る風致が、武藏野の曠野に存するほんの一點景に過ぎない。
 麴町(一)の富士見町、日本橋の駿河町が、富士山を我物顔に占領
 して居ると同様、其處に何程かの風趣を生ぜぬことは無
 いとしても、そは遂に富士山を主としての光景とはならな
 いのだ。若し千里絶人煙的際涯の無い平夷の眸界を求める
 心よりして言へば、日本のごとき山岳重疊たる中であつて、
 さる特異の光景の除外例を希望する者より見て、武藏野の
 果が遠く太平洋に觸接する間を遮斷する此の筑波の山塊
 は、或意味に於て無用の贅物に過ぎないと言へる。昔の人の
 紀行を見ても、武藏野の逃水に誘はれて、あらぬ方に彷徨し

た者が晴れた筑波を望んで其の方向を定めて居るのがあ
る。それだけ此の平野の大きさを局限して居るとも言へる
のだ。

筑波山を主とした眺望は、山水兼備の常矩に則らなくとも、やはり霞浦の激瀧と相俟つ土浦附近の光景を擧ぐべきであらうか。予曾て香取、鹿島の両神宮に詣でて後潮來に遊び、其の後丘稻荷山に登つて、其の蘆洲の繼續する湖面を下瞰し、其の餘りに無變化な平面的光景をなすに飽いて、次いで土浦に出たことがある。等しく霞浦の眺であるけれども、筑波の山塊が左方の入江の上に高く聳立して、前日と全く相異なる風致をなすのを見て、多少の驚喜を禁じ得なかつた。

常矩

(一)常陸國の大
湖。大い琵琶
湖。次に會し
利根川に入る。
激瀧
(二)常陸國新治
郡。
(三)香取神宮。官
幣大社。下總
國香取町にあ
り。
(四)鹿島神宮。官
幣大社。常陸
國鹿島町にあ
り。

(一)日光山中。湖
水は落ちて華
嚴瀧となる。

琵琶湖、中禪寺湖を靜止的湖水とすれば、霞浦はやがて動
搖的湖水である。前者の永久不變の姿であるに比して、後者
は時々刻々に移動しつゝある。筑波山は其の動搖變化を、或
は監視し、或は擁護するものの如き態度で、親しく其の湖上
に莅むのである。霞浦も亦其の監視擁護に依頼するものの
如く、媚を其の長磯曲浦に寄せつゝある。春風秋雨、いづれか
此の山と湖に存する無聲の神話を語らざるものぞである。

—日本の山水—

一六 水都水郷

大庭 景秋

水の都とはいふまでも無くベニスであるが、私は嘗て初
夏の二日を彼處に過した時、端なくも霞浦畔の水郷潮來を

(1) Gondola. ベニスにて用ひらるゝ細長き舟。
 (2) John Ruskin. 英國の美術批評家、社會改良論者、西曆一八一九—一九〇〇年。

(3) Adriatic Sea. 伊太利の東にある海。
 (4) もと和泉國の近海の稱。廣く大阪灣をもいふ。

(5) 詩人。姓は大窪、名は行常陸の人。

思ひ出した。そして垢抜のした風流をやるべく、伊太利なる此の水の都の月の夜に、^(一)ゴンドラを浮べて見たいと思つた。よし流水行雲に天意の發露を見得るラスキンの審美眼は無くとも、苟も西洋史の一端を知る者には、史興豊かなベニスを忘れることは出来まい。又苟も水邊の景物を愛する者には、詩趣に富めるベニスを忘れることは出来まい。

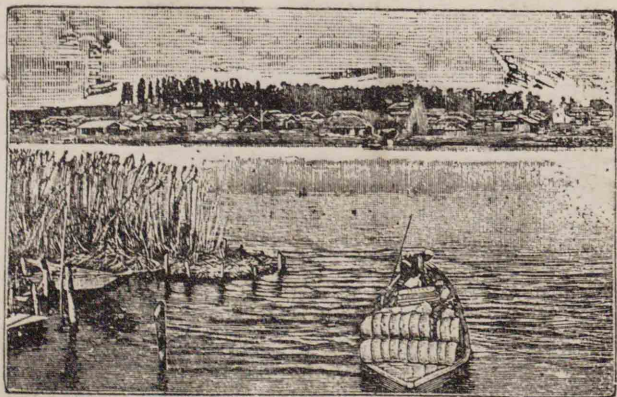
或はベニスを我が堺に比較する人がある。^(二)アドリヤ海を瀬戸内海とし、ベニス灣を茅渚の浦とするならば、ベニスは正に堺に相當する。否獨り地理の上ばかりでなく、両者が世界的貿易港として或時代の間輝いたことも、亦同様である。しかも水の都としての氣分は、より多く潮來出島を聯想せしめる。詩佛が「試從十二橋頭望、何水何橋無月明」と潮來を詠

(1) St. Marco.

俗世間的

(2) 名に友房、克堂は其の號。政治家の明治三年。五十九年歿。

じた一句は、移して以てベニス大小の運河を謠ふに足ると思ふ。サン・マルコの寺は鹿島神社に相當するであらうが、寺の前の俗世間的な淺草觀音式の仲見世と鳩の群は、鹿島神社の森嚴崇高な氣分には及びもつかぬ。唯一百二十の島嶼の上に築かれた都市、其の中を縦横する百五十の運河、而して其の上に架した大理石の橋實に三百八十橋。詩佛の句ではないが、何れの水何れの橋も、月を追うて月を得られざるなき實景である。故^(三)佐々克堂が伊太利漫遊中の句に、「殘山剩水



潮 來

尙依々」とあるが、しかもベニスの水だけは、歴史、經濟を通じたの水で、なかく、剩水どころではなく、此の水都の民と共に永久のものである。

風景觀
兼葭蒼茫の間

たゞ風景觀から比較すると、ベニスは遂に山水を収め得た潮來の畫趣には及ばぬ。兼葭蒼茫の間から筑波一帶の山を望むやうな水郷の背景がなく、霞浦の景に一點色を添ふる浮島の如き島影も無い。ベニスの誇は飽くまでもゴンドラと大理石の橋である。潮來の舊記によれば、「家は河中に作り出し、舫町に乗り、川向の出島に到る」とある。舫町の如何なる小舟であるかは分らぬが、埃及時代の戰艦を模した古雅なゴンドラには及ぶまい。ゴンドラの舟子が終始船尾に立つて、曲折せる運河の辻々で、一種の掛聲を合圖に、櫂の音閑

Motor boat.

けく軽く漕去る様は、蓋し天下一品である。かゝる水路の舟行に、水を渡つて傳はるサン・マルコ寺の鐘聲は、閑寂なゴンドラの氣分に調和するが、近頃漸く殖えて來たモーター・ボートや、小汽艇のけたゝましい笛聲は、確かにベニス趣味の破壊である。

然るに畫舫にも石橋にも代へ難い此の地の名物が今一つある。旅行の神ともいふべきマルコ・ポーロ其の人である。此の水の都に生れたマルコ・ポーロが、歐亞の大陸を横斷し、往復して、東方の國々を西方の人々に紹



ス ニ ペ

介した事は、何となく神業のやうに感ぜられるのであるが、霞浦畔の佐原からも、亦旅行上の一偉人が出てゐるのは、更に神意の偶然で無い事を想はしめる。偉人とは即ち我が測量學の鼻祖にして地理學者たる伊能忠敬先生である。

—世界を家として—

一七 湖沼と人類

田中阿歌麿

滌溜

窪地に滌溜せる一泓の水、漫然として之を見る時は、多く吾人と相關せざるが如きも、深く之を研究せんか、その人類生活の上に及せる影響の甚大なる、殆ど測り知るべからざるものあり。その氣候上の關係は固より、その沿岸住民の性情、思想等に至るまで、その影響する所實に意想の外にあり。

陽氣一轉

湖沼がその沿岸住民に與ふる最も偉大なる影響はその氣候の調和作用なり。即ち湖沼のある處は、夏季にありては清涼に、冬季は温暖なるを常とす。然り、湖沼はかく氣温の調和者たると共に、又天然の一大滌水器なり。見よ、晩夏の候、強大なる低氣壓の我が日本群島を襲うて、豪雨沛然として至り、坂地に降りし無限の天水の一時に溢れて平地を浸す時、或は陽氣一轉、春風四海を吹いて積雪急に融解し、一大洪水の乍ち山麓を衝く際、狹隘なる溪流は激奔瀉下し、山を崩し、谷を埋め、その餘勢逸して平野に出づるや、田畑を荒し、財貨を損ひ、人畜を傷つけて猶已まず、海に注入して港口を埋め、砂嘴を突出せしめ、はた淺瀨を作りて船舶を破る。その慘狀實に窮る所を知らず。この時に當り、瀉水を受くる大滌水器

早魃
野に一青な

瑤臺

をしてその流程に當らしめんか、滔々たる水勢も頓に濺みて膏の如くならんのみ。湖沼は實にこの漑水器の作用をなすものにして、澎湃たる大洪水の奔騰しつゝ、襲ひ來る時と雖も、湖畔の水位は僅かに寸餘を高むるに過ぎず。而してその湖尻より潺々注いで膏野を潤すこと、毫も平日と異ならざるなり。之に反して早魃久しきに彌り、井水涸れ、地殼裂け、野に一青なき時に方り、無盡藏の靈泉を供して吝しまざるもの、實に又湖沼なりとせずや。抑、凡百の物溢れざれば必ず盡く。獨り湖沼は受けて淫せず、放ちて涸れず、時處に依りて表裏することなき、神人の坦懷に比すべきものあり。山間の農民が湖神に詣でて膏雨を祈り、はた湖水を視て以て龍宮の瑤臺となす所以のもの、決して故なきに非ざるなり。

Alpoue.
アルプス山系に發し、ゼネバ湖に入り、その東南部を經て地中海に入る。
Gneva.
瑞士、佛蘭西境上にある湖水。
羊腸

霄壤も管ならず

湖沼はかく天然の一大漑水器たると共に、又濾過器なり。濁流の滔々として湖沼に入るや、その拉し來れる土砂は湖底に沈澱し、湖尻より流出する水は既に濾滓せられて、淨明透徹、水晶を溶したるが如し。見よ、アルプス幾百の氷河の輸送し來れる土砂を運べるローヌの濁流が、一度ゼネバ湖に入り、而してその流れてゼネバの市を過ぐるや、又舊態を存せず、幾萬の生靈頼りて以て生を樂しむに非ずや。更に湖沼を交通機關として觀察せんに、羊腸たる山谷の險路を攀ち、蜿蜒たる長曲線を辿らんよりも、弓の弦に於ける最短距離によりて達すべき水利の便あり。その勞力に於て、その時間に於て、難易、長短の差、實に霄壤も管ならずなり。想ふに、往時湖畔が開化の魁をなし、又現時湖畔に於て、そ

の地方に於ける都市の存在を見るは、決して怪しむに足らざるなり。

更に又史上に於て、湖沼が如何に人類の生活、思想に影響せしかを見よ。抑、湖沼は天然の濠にして、敵を防ぐべく、國土の安全を保つべし。往古蠻族の棲息せし跡を踏査するに、多くは湖沼に面して居所を構へ、或は水中の島嶼、或は淺洲の上に城壘を築きしを尋ね得べし。此等は單に飲料水を得んが爲に、又は運輸の便を計らんが爲に、寧ろ外敵の侵撃を避けんが爲に、湖沼を自家防禦の濠水となしたるなり。江州の安土城、信州諏訪の高島城(一)の如きも、皆兵備上に湖沼を利用せしものなり。

かくて湖畔の住民は外部よりの擾亂を蒙ることなく、而

(一) 蒲生郡。天正四年織田信長築く。
(二) 上諏訪町。諏訪氏の居城。

氣魄

も湖沼の流域の、多くは峯巒を以て取圍まるゝが故に、その住民の氣魄自ら團結自助の精神に富み、軀幹強壯にして風格豪邁なるが上、深碧の湛水は能く思索を裨けて、智能を啓發せしむ。

水晶盤裏

湖沼の美術文學に於けるや如何に、漾々たる水晶盤裏、巒山の翠綠を湛へて風色既に佳なり。況や月に、花に、將紅葉に、靜かなる水を添へて美は愈美に、趣は更に趣を加へ、正に是自然の一大活畫、一大詩篇に非ずや。細雨しぶきて湖面の風情夢の如き時、白鷺の蘆荻繁き汀に佇む趣は、早くより絶好の湖畔的畫題として描かるゝ所。冬季四巒の白雪皚々として、玲瓏たる湖鏡に懸る姿の崇高なる、他に比すべきものあらず。實に大自然の美觀はこの湖沼を得て、始めて眼睛を點

眼睛を點す

面上三斗の塵を浴ぶ

じたりと謂ふべし。若しそれ日夕面上三斗の塵を浴びて人寰に營々たる士の寸暇を偷んで湖畔に長嘯せば、大自然はその靈に生命の源泉を注いで之を復活せしめん。——諏訪湖——

一八 芳流閣上の血戦

瀧澤馬琴

古の人謂はずや、「禍福は糾へる繩の如し。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。」(一)こは福の倚る處はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり、とは思へども豫てより誰かよく其の極を知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身につけつ、艱苦のうち、年を経て、得難き時を得てしかば、遙々濟我へ齎して、名を揚げ家を興すべかりし、其の福は禍と、ふりかはりたる村雨の、(三)又は故の物ならで、我

(一)禍之與福何異糾纏(漢書賈誼傳)禍福は糾へる繩塞翁が馬(二)福兮福之所倚福兮禍之所伏孰知其極(老子)

(三)下總國古河。

が身を劈く讐とぞなりし、憾を爰に釋く由もなく、(二)緯急にして、意外にあり。僅かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥の圍を切開きて、流芳閣の屋の上に、攀登れどもとにかく



瀧處に必死をめ極たる、心の中は如何なりけん、思ひ遣るだにいと痛馬まし。
琴 されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繋

がれし、禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀。犬塚信乃を搦めよ。」(一)とて、(二)愍に擇みいだされつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられん事、願はしからずと思へど

身を霞ませ
て

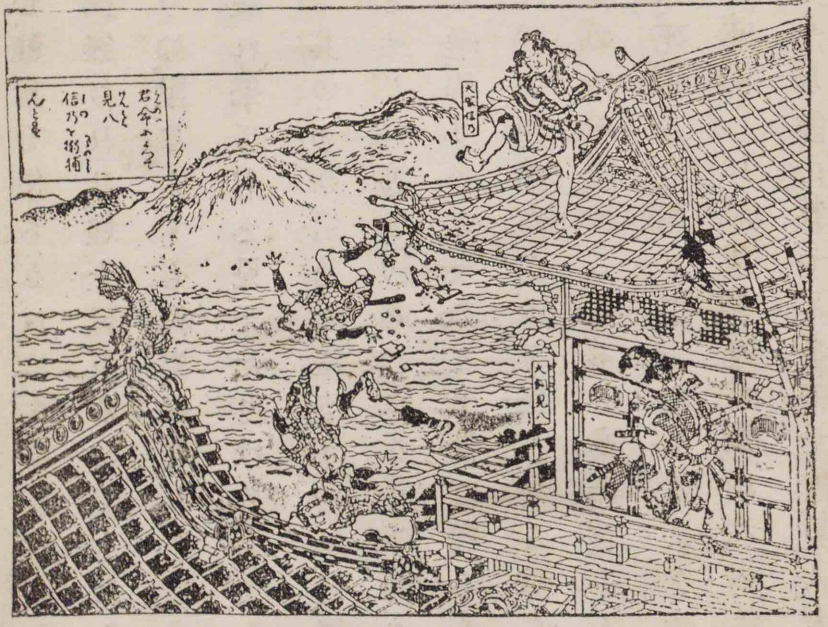
も、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き、彼の樓閣は
 三層なり。其の二層なる櫓の上まで、身を霞ませて登りて見
 れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき、頃は六月二
 十一日、昨日も今日も乾蒸の、燄熱を渡る敷瓦は、凸凹隙なく
 波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に入る、流は
 名に負ふ坂東太郎、水際の舟楫を絶えて、進退既に谷りし、
 敵にしあればいかで我、繋ぎ留めんと、颯の、樹傳ふ如くさら
 さら、と、登り果てたる三層の、屋根には目柴翳す由も無く、迭
 に透を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる
 鶴の巢を巨蛇の狙ふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床
 几に腰を打掛けて、勝負いかにと見上げたり。又閣の東西に

浮圖

(一) 足利持氏の
 領子。鎌倉の管
 領。管領足利氏の
 執權職。

(一) 周代の哲學
 者。名は程。



(書挿傳犬八見里) 戦血の上閣流芳

は、腹巻したる許多の
 士卒、槍、長刀を煌かし、
 或は箭を負ひ、弓杖突
 立て、組んで落ちなば
 撃留めんとて、項を反
 してこれを觀る。しか
 のみならず外面は、連
 綿として杳かなる、河
 水遠りて砌を浸せば、
 たとひ信乃武事長け、
 膂力衰へず、よく見八
 に捷ちたりとも、墨氏

(一)名は公輪般。魯の人。

が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯無ければ、地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも羅に入りぬ。獸ならずも狩場に在り。三寸息絶ゆれば、縶こみな休まん。脱れ果てじと見えたりけり。

其のとき信乃思ふやう、初層、二層の屋の上まで、追登らんとせし兵等を、切落しつる其の後は、絶えて近づく者なきに、今唯獨り登り來ぬるは、世に覺ある力士ならん。きやつはこれ膳臣巴提便が、虎を暴こにせる勇あるか、また富田(三)の三郎が、鹿の角を裂ける力あるか。遮莫一人の敵なり。引組ひんで刺違へ、死するに難き事やはある。よき敵にこそ御座んなれ。目に物見せんと血刀を、袴の稜たもて推拭ひ、高瀬の如き方桴はに立つたる儘に寄するを待てば、見八も亦思ふやう、彼の犬塚が

(二)欽明天皇の朝、百濟に使し、雪夜幼兒の虎に食はれしを憤り、虎穴を探りて虎を獲たる人。
(三)和田義盛の臣。將軍實朝の前にて二箇の犬鹿角を重ねて折る。

御誼さふ

一上一下

手練

見る目はるか

武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて、他の援を借る事あらば、獄舎の中より此の役儀に、擇み出されしかひも無し。搦め捕るとも撃たるゝとも、勝負を一時に決せんものを」と思ひにければ、些ちも擬議せず、「御誼さふ」と呼掛けて、持つたる十手を閃かし、飛ぶがごとくに方桴の、左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せ附けず、「心得たり」と鋭き太刀風に、撃つをはつしと受留めて、拂へば透かさずこむ刀尖さを、支へて流す一上一下、迂る藁を踏止めて、頻に進む捕手の秘術、彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負をわかざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいとゞはるかなり。

さる程に犬塚信乃は侮り難き見八が武藝に、敵を得たりけりと、思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音、掛聲。兩虎深山に挑む時、鏗然として風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなる、いと高き閣の棟にして、死を争ひし爲體、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖、肱當のはづれを、裏かくまでに切裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痕を負ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場を計りて、撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を、見八右手に受流して、返す拳に付入りつゝ、やつと掛けたる聲と共に、眉間を望みて、磔と打つ、十手をちやうと受留むる、信乃が刃は鏢際より、折れて遙かに

覆車

飛失せつ。見八得たりと無手と組むを、そが儘左手に引着けて、迭に利腕楚と取り、振倒さんと曳聲合せて、揉みつ揉まるる力足、これかれ齊しく蹈迂らして、河邊の方へころ／＼と、身を輾ばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削り成したる藁の勢、止るべくもあらざめれど、迭にとつたる手を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、打累りつゝ、撞と落つれば、傾く舷と立つ浪に、さんぶと音する水煙、纜ちやうと張切つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

——南總里見八犬傳——

一九 醒睡笑

大名のもとに客あり。ふるまひに湯漬出でたり。其の席へ又客あり。それにも膳を据ゑたり。又客來あり。膳を出せとあれどもつひに出しかぬる時、物まかなふ者を呼出し、「何とて手間もいらぬ事の遅きや。湯を得わかさぬか。」としからるゝ時、手を束ねて、「湯はござるが、づけが御座ない。」と申したるにぞ、どつと笑になりける。

家主飯を食ふ處へ、常に寄合ふ人來りぬ。なにと、飯ははや過ぎたるか。」と問ふに、「いまだし。」あらおたのしみや。」とてかまはず。又人來る時、飯は食はれぬか。」と問ふ。「はや過ぎたり。」といふ。あらお氣やすさや。」

一人は寒山、一人は拾得と各名をいうて出る狂言あり。然

〔支那唐代の隱士と奇僧。尚卷十第八課を見よ。〕

神妙にも無き人

るに二人連立ちたる先の者、是は寒山拾得と申す者にて候。」と名乗りしかば、次の者言はんこと無かりしに、「我等も其の連にて候。」

神妙にも無き人集り居ける中に、一人いふ、「其方たちの中に、雷の鮓を食うた人があるか。」いや無し。」さうあらう。稀なものぢや程に。」してそちは食うたか。」なかく、食うた。」味は甘いか、酸いか。」と問ふに、「ちと雲臭かつた。」

何とて芍薬をば歌に詠みたる無きぞと、不審する者あれば、それこそ詠みたる歌あれ。

難波津に芍薬の花冬ごもり

今をはるべと芍薬のはな。

けしからず物ごとに祝ふ者ありて、與三郎といふ中間に、

無興

大晦日の晚いひ教へけるは、今宵は常より疾く宿に歸り休み、明日は早く起きて來り門を叩け。内より「たぞや」といふ時、『福の神にて候。』と答へよ。即ち戸を明けて呼入れん。」と懇に言ひふくめて後、亭主は心にかげ、鶏の鳴くと同じやうに起きて、門に待ち居けり。案の如く戸をたたく。たぞく。」と問ふ。「いや與三郎。」と答ふる無興さ。しぶく門をあけてより、そこもと火を點し、若水を汲み、爛をすうれども、亭主顔の様悪しくて、更に物いはず。中間不思議に思ひ、つくづく思案し見れど、宵に教へられし福の神を打忘れ、やうく酒を飲む頃に思ひ出して仰天し、膳をあげ、座敷を立ち様に、「さらば福の神で御座ある。お暇申し參らする。」といひたり。 — 醒睡笑 —

仰天す

二〇 歌人西行 其の一

藤岡作太郎

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧。其の名を一時の名流俊成と等しくし、鎌倉室町の世、抑歌道に於て定家を難せん輩は冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。」といはれし時、稱讚の聲また定家に譲らず。近世に至つて、定家の價值いたく墜落したれども、山家集の一書はなほ如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名今に嘖々たるは抑、何が故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立て、義清亦勇敢にして弓術をよくす。和歌に^堪能なるは蓋し其の天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇其の才を愛して登用せんとす。されど義清は名利を喜ばずして、常に厭離

冥加

厭離の志

の志あり。其の出家の動機に就いては、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝參朝せんとて、約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば「殿は、昨夜頓死し給へり。」とて、若き妻、老いたる母の重り伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、棄恩入無爲は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取纏れるを、思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つ始めぞと、顧もせで家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せり。と。かくて名を西行又は圓位といふ。時に保延六年にして、歳正に廿三なりき。西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊

惕然
自愛
性
自
然

(一)右大將源賴朝

(二)弘法大師

桑門 坊さん

抖擻

悠々自適

悠々自適
悠々自適
悠々自適

野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常にいへらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。と。一箇の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠々自適、興至れば即ち和歌を詠ず。高尾の文覺これを惡み、弟子に告げて曰く、「遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外、他事あるべからず。數寄を立て、此處彼處に嘯きありく條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし。」と。其の後高尾の法華會に、行脚の僧の參りあひて、花の陰など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ。」と問へば、「西行と申す者。」といふ。文覺手くすねを引き、望の叶ひつる體にて、明障子を開けて出づ。暫しまもりて、

手くすね

「年頃承り及びたるに、御尋悦び入り候。」とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子達はいかなる事のいで來んかと手に汗を握りたるに、此の體たらくにて、西行は無事に歸り去りしかば、「日頃の仰に違ひたるは。」と怪しみ問ふ。文覺答へて、「あらいひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面やうか。文覺をこそ打たんずるものなれ。」といへりといふ。

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて、詠じて曰く

ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

晩年洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日七十三歳にして入滅せり。其の和

幽契違はず

入涅槃
釋迦の契も
幽契違はず

憧る

(一)足利氏中世の
連歌師。文龜
二年(一一六
二)歿。年八十

風月に放浪
雲水に吟嘯
吟囊を肥す

歌を集めたるもの即ち山家集なり。

二一 歌人西行 其の二

我が國古來詩人多しといへども、深く自然に憧れ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へし者前後僅かに三人。西行、宗祇、芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑して其の跡を追ひし者、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行、宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人。各其の道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかにかに詩人の吟囊を肥すものな

踏踏す

そもく

るかを知るべし。
 間を己が世界とし、海も見ぬ天地に踏踏して、足畿外に出でず、一生の経過極めて單調に、感情を刺衝するものなければ、随つて思想の發展もあることなし。見聞する所は東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、唯同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想辭句の上にも、自ら典型を生じて、天真を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊其の内容は空しく、滔々として風を成せる時、西行獨り蹶起して、從來踏襲の典型を簸却し、みづから山水の間に逍遙し

天真を忘る

滔々風を成す

簸却す

堂奥

雨そぐ花
 橋に風すぎ
 て山ほと
 ぎす雲にな
 くなり

藤原俊成

の詠

親昵す

て、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。

西行既に古來の典型を捨て、直ちに自然の堂奥に入らんとす。深く山川草木を愛して、之を視る事猶己を視るが如

西行筆蹟

く、親昵して同情の念に堪へざるは固より然るべき事なり。

わきて見ん老木は花もあはれなり

いまいくたびか春にあふべき
 にまた我が住みうくて浮れなば
 松はひとりにならんとすらん

相忤く

選を殊にす

同情は進んで愛着となりぬ、臨終の大事到る時何物か件
なはん。一切の眷屬珍寶皆我と相忤く。かくはかなみて西行
は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世間を捨てたり。
されどゆかしき花よ、月よ。一旦の沈淪に昨日の親友も今日
の仇敵たる時、山色水聲の我に睦ぶこと舊に依り、訪ふ人も
無き山里に心永き春秋は尋ぬることを忘れず。此の親切な
る自然に對して、其の慰藉に報ゆることを知らざる者は冷
血無情の人のみ。西行は最も自然の價値を認めたるもの、隨
つてこれが愛着の念も遙かに群衆と選を殊にしたり。

おのづから花なき年の春もあらば

何につけてか日を送らまし

うちつけにまた來ん秋の今宵まで

眞如の月

清淡虚無

疑懼の境

月ゆる惜しくなる命かな

愛着は迷なり。此の雲を去らざれば眞如の月は明らか
り難しと雖も、山水もと無心にして、人間の如き魔性を有せ
ず。これを以て窓前日夜の友とす。清淡虚無、一心もまた物に
よつて動かされざること山の如く、機に随つて轉ずること
水の如し。來往自在、こゝに疑懼の境も去つて、安心は漸く決
定すべし。

今更に春を忘るゝ花もあらじ

やすく待ちつゝ、今日も暮さん

雲に唯今宵の月をまかせてん

いとふとしてしも霽れぬものゆる

西行の歌は企てゝなすものにあらずして、自ら成れるな

斧鑿の痕

り。次に擧ぐる所の歌により、其のいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

ながむるに慰む事は無けれども

月を友にてあかすころかな

今よりは昔がたりは心せん

あやしきまでに袖しをれけり

要するに、西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹來つて松濤乃ち鳴る。其の聲必ず自然を離れず、平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれどもことさらに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。

—國文學史—

孝徳天皇の皇子。

二二 羈旅の歌

松が枝に結べる歌

有馬皇子

家にあれば筥に盛る飯を草枕

たびにしあれば椎の葉に盛る

あづまにまかりける時

紀貫之

絲による物ならなくに別れ路の

こゝろ細くもおもほゆるかな

陸奥の白河の關越えけるに

平兼盛

便あらばいかで都へ告げやらん

けふ白河の關はこえぬと

(一)共に山城國相樂郡。

題しらず

讀人しらず

都出でて今日みかの原(一)いづみ川(二)

かはかぜさむし衣かせやま(三)

旅の歌

藤原俊成

あはれなる野島が崎の庵かな

露おく袖に波もかけけり

東の方にまかりけるに

西行法師

年たけてまた越ゆべしと思ひきや

いのちなりけり小夜の中山

旅宿花

平忠度

行暮れて木の下蔭を宿とせば

はなや今宵のあるじならまし

(一)後醍醐天皇の第八皇子。

箱根に詣つとて

源實朝

箱根路を我が越えくれば伊豆の海や

おきの小島に波のよる見ゆ

羈中百首の歌よみけるに菖蒲を(一)

宗良親王

菖蒲ひく今宵ばかりや思ひやる

みやこも草の枕なるらん

二三 孔子の故郷

澁川玄耳

大成殿參拜に出かける。四時過ぎてゐる。最早暮れるに間がない。大きな門を入ると廣場がある。右に大きな邸宅がある。之が衍聖公府だと教へられた。其の隣が即ち聖廟である。

聖廟

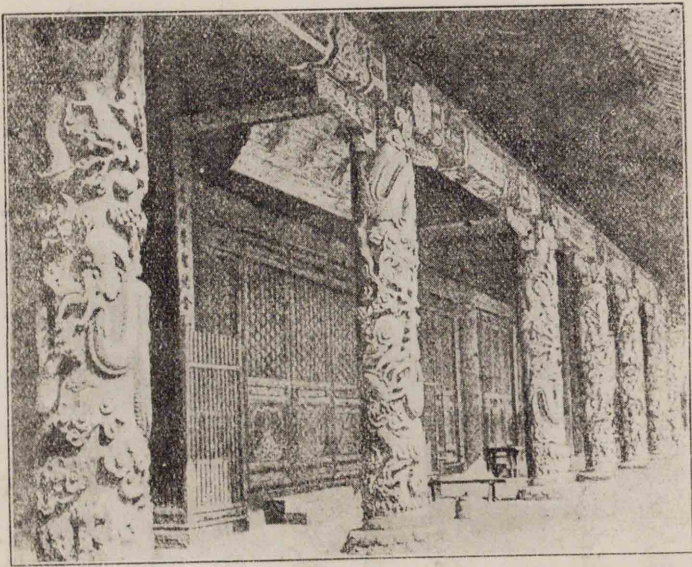
「金聲玉振。」と題した門を入つて、次々に幾つかの門を潜つた。役人だか番人だか、五六人居た。晚いから參拜は出來ぬといふのを、日本から來た、衍聖公へ紹介狀持參の者だといつて、開門させた。

境内は柏が天を蔽うてゐる。壯嚴な樓閣殿堂が相連つてゐる。大成殿の石柱の如きは、埃及、亞刺比亞、希臘、羅馬の建築に比して讓る所がない。其の巨大な點に於ても、柱を捲く雙龍の彫刻の意匠技能に於ても、亦支那美術の誇である。聞いてゐるだが、成程さうだらうと驚歎して、柱を撫てまはして見た。忙しい中に、案内人は傍の石欄の柱を平手で敲いて、予を招く。何かと訊けば、黙つて又敲く。奇なるかな。例へば釣鐘を平手で敲いた様に、金屬のやうな響がする。予は賢し氣に

外の二三本の石柱を試みて見たが、一個もそんな響はない、

皆頑然たる石の音、いたづらに掌が痛かつた。案内者は怎麼生そまうまといつたやうな顔で、予を願て一笑する。

孔子に對する渴仰者には幾種類がある。程子ちやう曰く、「論語を讀むに、讀了の後全然事無きものあり。讀了の後其の中の一兩句を得て喜ぶものあり。讀了の後こ



大成殿

渴仰

「程頤のこと。明道先生といふ。」

手の舞ひ足の踏む所を知らず

れを好むことを知るものあり。讀了の後直ちに手の舞ひ足

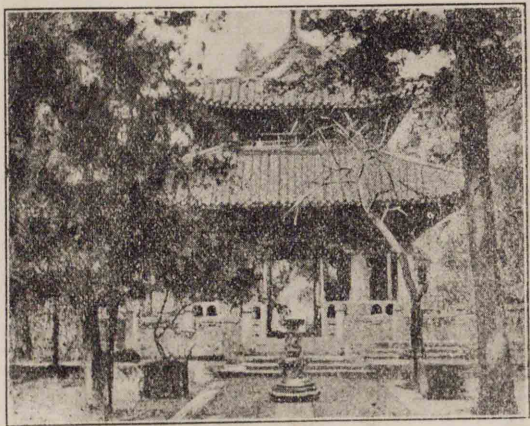
の蹈む所を知らざるものあり」と此の最後の歡喜者が、眞に渴仰信心の輩である。

支那は歴代概ね試験を以て官を採つた。支那の試験には儒學の知識が基礎であつた。随つて支那に於ける孔子教の勢力は、一面に於て法制の力を假つて普及したと謂つてよい。之に加へて、歷朝の帝王が政略的に尊敬を加へた爲、孔子は國教的本尊と爲り、曲阜(一)は支那のエルサレム、メッカ(二)となつた。そして其の殿堂樓閣は全く宗教的に莊嚴を極めてゐるのである。

孔子廟は孔子の住家の跡に建てたものと傳へられてゐる。境内に種々の遺蹟がある。杏壇といふのは、孔子がその門徒に教を説いた所ださうだ。孔子手植の柏ばくといふのもある。

(一)支那山東省兗州府の縣。
(二)Mecca
回教の聖都

達人



水」と「彼が飲んだ水」といふ意味である。

孔子は屢、餓死に瀕したことがあつた。達人は當時に容れ

何度か焼け、何度か枯れて、又芽生が出たのだといふ。いづれも餘りあてにはなるまい。門の内に入れば、此處も古柏が茂つてゐる。他に比して多く人の入らない所と覺しく、地面は濕つて、

杏草が高く、枯枝など散らばつて、何

となく物寂しい。恰も月が昇つてゐる。歩くうちに、牙渡つて、柏樹の壇影が濃くなつて來る。奥の方に二

三の碑が建て、ある「孔宅故井」と誌してある。案内者はいふ「他喫的

られないものに定まつてゐる。幾度か仕官して幾度か免職になつてゐる。偶、其の成功した官歴もあるが、それは變な職務である。初め委吏となり、料量平かなり次に司職吏となり、畜蕃息す」と褒められてゐる。司職吏といふのは、犠牲の牛羊を繋養する所の役人である。牛飼の親方である。此は青年時代の成功で、後は失意の境に在つて修養したものらしい。其の再び出て仕へたのは、五十を過ぎてからである。工部大臣となり、司法大臣となり、總理大臣心得となつたが、やり過ぎて失敗した。爾來どうにかして志を行はうと、十數年間諸侯に遊説したけれども、遂に大いに用ひられる機會がなくて、子弟と共に専ら詩書を講ずることになつた。併し其の全く仕官に念を斷つたのは、六十八の歳であるから、孔子の功名

心は、隨分旺盛であつたと謂はねばならぬ。予は孔子を天成の聖人とは思はない。修養の人、努力の人、精力の人として尊敬するのである。

——小敵大敵——

二四 槩を横たへて横を賦す

丞相曹操大船一艘を中央に浮べ、^(一)帥^(二)の字書きたる旗を樹てさせ、左右水寨に沿うて弩千張を伏せおき、自ら將臺の上に坐す。時に建安十二年冬十一月十五日なり。天氣快く晴れて風靜かに、浪平かなりければ、船中に酒宴を催し、諸大將を集めけるに、漸く暮に及びて東の山の端に皎々たる月さし登りて、其の光白日の如く、一帶の長江素練を曳くかと怪しまる。曹操が近侍の輩皆錦繡の袖を列ね、戈を擔ひ、槍を横た

(一) 支那三國魏の君主。字は孟德。諱して武帝といふ。
 (二) 揚子江の中流。此の時曹操吳を討たんとし、意氣全吳を呑みしが、赤壁に戦つて敗る。
 (三) 西暦二〇七年。神功皇后攝政七年。

素練を曳く

(一)今の江西省九江の附近。
(二)今の漢口。
寸眸に集る

(三)揚子江の南方、主として江蘇、浙江、安徽省の地。
(四)支那三國の都す。
揚子江の南方、主として江蘇、浙江、安徽省の地。吳の地なり。

(四)支那三國の都す。
支那三國の都す。

へて數百人排列し、文武の大將階級に依つて盡く集りしかば、曹操心の中勇み喜び、四方の景を望み見るに、名高く聳えたる南屏山、月に映じて畫がくが如く、東は柴桑の境を望み、西は夏口の江を極め、南に樊山、北に烏林、四邊の風景悉く寸眸に集りければ、俱に盃を啣んで、諸大將に向つて曰く、「我義兵を起してより以來、民の爲に兇惡を除き、誓つて四海を清めんとするに、大半既に平ぎたれども、未だ得ざるものは江南なり。我此の江南富饒の國を保つ事を得ば、國を富まし、兵を強くすべし。今我が手下に百萬の勢あり、諸大將力を盡して忠を致す、豈功業の成らざるを患へん。吳を平ぐる時は天下我に敵する者なし。然らば諸將と俱に富貴を受けて、永く太平を樂しむべし。我今夜の言を違へじ。諸大將も皆心に記

(一)共に吳王孫權の謀將。

(三)曹操の將軍。
心腹の患

(四)三國の一なる蜀の主劉備。
(五)劉備の軍師諸葛孔明。
股肱の臣
螻蟻の力

して忘るゝこと勿れ」といひければ、諸大將謝して曰く、「願はくは早く吳を平げて凱歌を唱へ、君の恩澤を蒙らん」と。酒宴既に夜半に及びければ、曹操遙かに江南を指して曰く、「周瑜、魯肅天の時を知らず、幸に我に心を寄する者ありて、窃に彼が心腹の患をなす。されば天我を助くるなり。荀攸諫めて曰く、「丞相輕々しく宣ふこと勿れ。萬一外に洩るゝ時は、大事必ず敗るべし。曹操笑うて曰く、「我今此の座の人を見るに、皆股肱の近臣なり。何事か外に洩るゝことあらん」とて、又夏口の方を指さし、「玄德、孔明皆己が螻蟻の力を料らずして我が泰山の重きを動かさんとするがをかし」と打笑ひ、又諸將に向つて曰く、「我今年五十四歳、もし吳の國を平げて銅雀臺を漳水のほとりに造り、其處に老後の樂みをなすを得ば、

(一)後漢靈帝の世妖賊張角内亂を起す。其の徒皆黃巾を着く。(西曆一八四年)
 (二)曹操と同時の梟雄。建安三年(西曆一九八年)曹操に殺さる。
 (三)後漢末の豪傑。建安四年亡ぶ。
 (四)前者の兄。建安七年亡ぶ。
 (五)有名なる曹操の「短歌行」なり。光陰を惜しんで、速に賢士を得て王業を建てんとする意を述ぶ。

我が願即ち足らん」とて、大いに笑うて已まざりけるに、忽ち鴉の聲南へ飛んで聞えしかば、左右の者に向つて問うて曰く、「此の鴉、夜中何の故にか鳴く。答へて曰く、「月の明るきを見て夜の明けたるか」と怪しむが故に、樹を離れて鳴き候。曹操又大いに笑ひ、槊を執つて船の首に立出で、酒を灑いで江を奠り、又飲むこと三杯にして、槊を横たへて諸將に曰ひけるは、「我此の槊を以て黃巾の賊を破り、呂布を擒にし、袁術を滅し、袁紹を平け、深く塞北に入つて遼東を定め、天下の内に縦横す。誠に大丈夫の志なり。況や今此の景に對して、甚だ慷慨の心あり。吾自ら歌を作らん。汝等之に和せよ。」とて、歌うて曰く、

(五) 對酒當歌。人生幾何。譬如朝露。去日苦多。

(一)古代支那にて酒を作りし人の名。轉じて酒。勸々鹿鳴以下の四句は詩經の句にて、鹿の友を集めて共に樂しむ意を歌ふ。青衿の子(學者)として飲宴を張らんと志をいふ。
 明々云々 故舊の士の漸く疎遠になるをいふ。
 月明星稀 賢士の出で、小人の絶ゆるをいふ。
 鳥鵲云々 賢士に依る所を求むべきを勸むるなり。
 (三)支那上世の名相。周文王の子。成王を相けて國基を定む。
 (四)北京と天津。
 (五)江蘇省松江府。支那第一の貿易港。
 (六)江蘇省の首府。古の姑蘇。

慨當以慷。幽思難忘。何以解憂。惟有杜康。
 青々子衿。悠悠我心。但爲君故。沈吟至今。
 勸々鹿鳴。食野之苹。我有嘉賓。鼓瑟吹笙。
 明々如月。何時可掇。憂從中來。不可斷絕。
 越陌度阡。枉用相存。契濶談讌。心念舊恩。
 月明星稀。鳥鵲南飛。遶樹三匝。無枝可依。
 山不厭高。水不厭深。周公吐哺。天下歸心。
 歌ひやんで、諸將皆之に和しけり。 通俗三國志

二五 支那の風景 内藤 湖南

京津地方は其の趣朔漠に近く、我が邦に在りては比照すべき地なし。上海、蘇州は平野の中に在りて猶大陸の風あり。

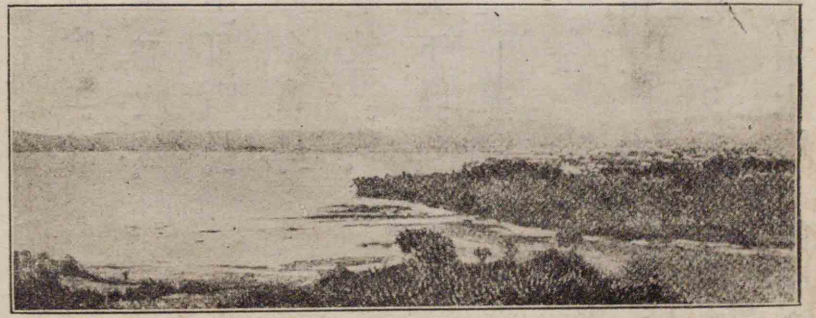
(一)浙江省の首府

(二)浙江省杭州府に在り

土瘦せ石秀
軟媚

澄瑩

利根沿岸地方に類して、更に宏濶を加ふ。獨り杭州地方は山迫り、海繞りて、地勢逼隘、頗る我が邦に似たり。城壁は女蘿蔓延、翠色滴らんとし、亦北方枯燥の比にあらず。西湖のごときは其の景致殆ど我が京畿、中國に類し、支那に在りては明媚秀麗の最たるもの。而も我が邦に比すれば、猶稍暗澹たるを免れず。我が瀬戸内の如き澄瑩秀朗なる風致は、支那には殆ど求め難きものなるべし。其の山は皆斷層より成り、土瘦せ石秀づ。是西湖の軟媚を以てすら尙然り。我が邦の如く土壤墳起して、



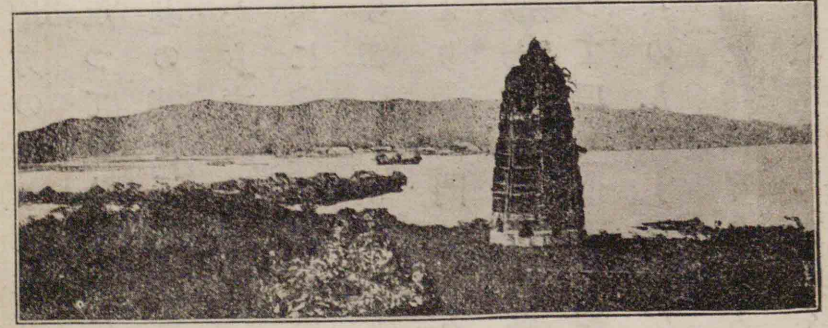
西

(一)揚子江上流の勝地。
(二)四川省蜀に入る棧道。
(三)天山地方。
(四)福建。廣東。

縦談

莽蒼宏豁
細膩

細波起伏の状を爲し、山容の温粹雅麗なるものは、絶えて見る事となし。我未だ三峽の險を溯り、劔閣の危を踏まず。未だ流沙の難を經、閩、粵の潮を觀ず。支那の風景を縦談するは、夏蟲の氷を語るに似たるものなきに非ず。但し其の過ぐる所に就いて憶斷すれば、實に此の如し。要するに其の長は莽蒼、宏豁、雄健、幽渺に在り、明麗、秀媚、細膩、委曲に在らず。之を譬ふれば、蔗稈を啖むが如く、漸く佳味に値ふ。我が邦の景の糖蜜を嘗むるが如く、齒牙皆甘きが如きには非ざるなり。



湖

(一)南京。

紫繞

(二)明の太祖の廟。

雄大なるは金陵の形勢なり。蓋し京津地方の如きは莽蒼はこれあり、而も其の山甚だ遠きが爲に、反つて雄偉の感に乏し。杭州の如きは明麗はこれあり、而も其の甚だ近きが爲に、全く雄偉の趣なし。金陵の地山甚だ遠からず、又甚だ近からず、蒼翠紫繞して時々其の角を缺く處、更に幽遠際なき思を生ぜしむ。且鍾山の如きあり、甚だ大ならざれども、而も雄特の姿に富む。野色遠近、高城百里、孝陵廟より朝陽門に至る高原に馬を驅れば、坐ろに千軍萬馬を馳驅して旌旗野を蔽へる古英雄を想はしむ。我同行の士に語つて曰く、「金陵に總督として謀叛氣の起らざる如き人物は、其の人必ず庸愚なり。」と。武昌の形勢は湖廣の沃土を控へ、亦甚だ雄偉なり。然るに其の地金陵上流の雄鎮として一方を制馭するに宜しく

河漢ならざるを知らん

——燕山楚水——

して、以て帝王の州と爲すべからず。黃鶴樓址若しくは龜山の頂に登らん者は、轉、吾が言の河漢ならざるを知らん。

二六 西郷隆盛論

尾崎行雄

後昆

隆洽

有史以來時を閱する幾千載、所謂英雄豪傑なる者も亦多し。或は名言徳行を以て勝り、或は鴻業偉勳を以て勝る。而して皆能く多少の聲望を當世に繋ぎ、渴仰を後昆に得ざるは無し。而して其の聲望渴仰の深淺大小を較するに、亦多く言行事業の大小深淺に伴なふものあるが如し。獨り吾が西郷南洲に至つては、古來の英豪と全く選を殊にし、徳望の隆洽なること、遠く其の言行事業の上に出づるを見る。

左思右考

南洲の言行欽すべからざるに非ず事業慕ふべからざるにあらず。但其の言行事業は、未だ彼が如き徳望を博するに値せざるを思ふ。我此の疑問を懐いて左思右考するもの多^{けい}年、遂に獲る所無し、窃に以て憾となす。然るに偶然の感興は、一朝にして倏ち多年の疑問を氷解せり。

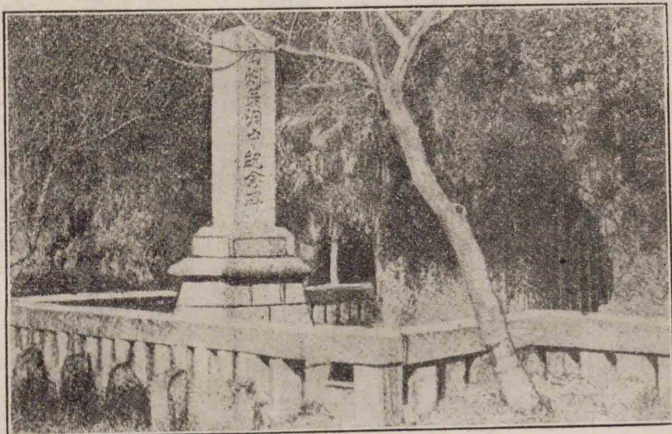
曾て東京市立養育院を巡視す。収容する所は皆是貧苦にして自立すること能はざる者に係るといへども、熟其の貌を視るに、富貴の相を具へて、爾く貧困なるべからざるもの間々之あり。之を當局者に諮るに、果然彼等の中には高等官の職に在りし者あり。巨萬の富を擁せし者あり。然るに不期の變に遇ふに方りて、直ちに養育院中の人となるは、榮枯の變化亦激しからずや。此の輩獨り豈艱難相濟ひ、變災相弔

Good morning!

隨^れ落^ち 品^は階^は下^に劣^になる事
事^は成^るに^あら^ずも^ちなる事

性癖招致

與り聞く



西郷隆盛陣亡の趾

らく「これ蓋し深慮を要すべき大問題なり。當局者の經驗に

する親族故舊無からんや。是に於てか思へらく、「墮落此の極に及ぶものは、其の身に固有の性癖ありて、自ら不幸を招致するにあらざる無きを得んや」と。乃ち卒然として當局者に問うて曰く、「入院者中の一般に通ずる特質なるもの無からんや。若しこれあらば、願はくは與り聞くを得ん」と。

余は卒然として疑問を發したりといへども、翻つて又思へ

卒然として

白眼

白眼
輕蔑的態度
他人を見下す
同情の交換
影の形に随ふ

豊なるを以てすとも、或は直ちに答へ難からん」と。而も當局者は聲に應じて對へて曰く「然り、洵にこれあり。他人に對して同情を缺き、毫も自ら抑制すること能はざるもの、即ち一般に通ずる性癖なり。」と。余は其の應答の甚だ速なるに驚くと共に、一種の感興は油然而として湧けり。而して之と同時に回憶したるものを西郷南洲とす。西郷南洲
身は社會の高位に在るも、家に巨萬の富を擁するも、苟も他に對して同情を缺き、獻身の熱誠無くんば、他人亦白眼を以て我を視る。一朝蹉跌に遭ひて凍餓するも、亦顧る者無き所以なり。畢竟社會は同情の交換を以て成る。知るべし、善悪の因、慶殃の果、應報の違はざること影の形に随ふが如きものあるを。社會は同情の交換を以て成立する所以を解し、同

(一) 大久保利通。

(二) 木戸孝九。

(三) 伊藤博文と大隈重信。

衆星北斗に拱ふ

怨嗟

(四) 明治十年。

情を缺く者の、遂に他の同情を買ふ能はざるを知らば、其の裏面に於て德望の歸する、亦自ら其の由る所あるを推すべし。而して南洲の面目庶幾はくは始めて鬚鬣たるを得んか。之を維新の諸豪に觀るに、南洲の果斷明決は甲東に如かず。謀慮周密は松菊に如かず。若しそれ學藝才辯に至つては、藤隈二君に如かざることを遠かるべし。而も挺然群を抜き望を負ふこと、猶衆星の北斗に拱ふが如くなりしは何ぞや。征韓の議破れて急流を勇退し、孤馬に鞭うちて帝都を去るも、毫も怨嗟の風無く、悠悠たる覺城の天、犬を逐ひ、兎を獵して閑適自ら遣る。此の間誰か叛心を藏すといはんや。若し眞に叛せんと欲せば、前に前原の變あり、江藤の亂あり。丁丑の歳を待たずして乘すべきの好機に乏しからず。況や重望

好機方策

行路の人に
忍びず

跣天踏地
世中

揣摩億測
勝法
心事

恭謙士に下

彼が如きを以てして、干戈の外に施すべきの好機方策無し
といはんや。今に及ぶまで、彼が叛跡を云々するは未だ以て
英雄の心事を解する者にあらず。

彼固より行路の人に忍びざる情あり。況や多年艱苦を共
にし、水火に出入し、愛子友弟に等しき配下に對するに於て
をや。丁丑の死は即ち彼が是等の配下に捧げたる犠牲のみ。
世或は月照の死に對して西郷を議する者ありと雖も、我を
以て之を見るに、唯其跣天踏地の志士を憐むの情に勝へず、
之を救ふの道無きが爲は、自ら亦死を決して共に海に投じ
たるに過ぎず。漫りに揣摩億測を逞しうして種々の言議を
挾むが如きは、英雄を以て兒女の情無しとするの妄に坐す。
恭謙士に下る王莽も、或は以て一時の隆譽を博し得べし。

局

人心の歸服を得んとして、恩を施し惠を加へ、強ひて笑を賣
る者は世に多し。而も遂に南洲の萬一を庶幾すること能は
ざるは、多く人工の假作に出でて、性情の自然に基づかざれ
ばなり。塗粉は久しからずして剥落す。人工の假作は永く本
來の面目を蔽ふ事を得んや。情熾なる時は智力或は其の作
用を鈍うす。一度動いて同情の念に驅らるれば、天下の大事
に關する軀を忘れて、一故舊の爲に死を決し、百二都城の子
弟に擁せられて、千載叛賊の名に甘んず。大局の打算を誤る
を笑ふ勿れ。兒女の情に同じきを嘲る勿れ。南洲の南洲たる
所以是に在りて、而して人の偉大なる所以實に是に存す。
一々利害を計較し、得失を打算し、自我を立つるに専らな
らば、他人亦此の如くにして我に對せん。其の自ら衣食する

人望は同情の反射

能はざるに及んで、直ちに養育院中の人となる、亦怪しむに足らず。己を無みし軀を捐て、他人の爲に同情せば、學問才藝の取るに足るもの無きも、猶能く衆心を得るに足らん。畢竟人望は同情の反射なり。我より注ぐものを同情といひ、他より返るものを人望といふ。もとこれ一物にして二あるに非ざるに似たり。

澆季

人、偉大ならんせば、まづ其の仁心を修養するを要す。他の冷酷を怨み、世の澆季を歎じて、其の極社會の組織を非議する者は、恐らくは自ら省察するを急とすべし。我一日養育院に臨んで、偶然感興を催し、延いて南洲に關する多年の疑問を氷解し得たりと信じ、記して少年子弟研鑽の料に資す。

自修文

一 我が國の童話

我が國に最も弘く行はるゝ童話は、桃太郎、花咲爺、かち／＼山、猿蟹合戦、舌切雀等なるべし。童話は祖先以來父母より子に子より孫に、口々に傳承したる國民的説話にして、其の起原を尋ねれば頗る古し。神代史に伊弉諾尊が黄泉國よりの歸路、桃の實を投げつけて鬼を拒ぎ給ふこと見えたり。又少彦名尊が粟莖にはじかれて、常世の國に渡り給ふこと見えたり。桃太郎の鬼が島に渡りて鬼退治をなすといふこと、此等神代の説話に本づけるなるべし。因幡の白兔が鴈を欺きて皮を剥がれ、海水に浴して更に苦痛を増し、こと、かち／＼山に狸が火傷をなし、膏藥を買ひて更に疼痛を大ならしむると、其の趣相似たり。白兔の話にては、兎惡者なるに、かち／＼山にては、兎却つて手柄

傳承す
る。うけつたへ

國民的説話
國民全體の知
つて居る話。
一 神代の歴史。
古事記や日本
書紀の神代の
卷。伊弉諾尊が
其の死なれた後
の行なつた泉
國へ行かされた
如く、何れも
美の如何にも
居られなつて
見られる時、
歸るに退は
され、鬼の追は
桃の實をなげ
て拒がれたこと
大國主命と共
に此の國土を
神嘗されたる
外國。

時代的特調
 其の時代特有の調子。
 あらじかご
 おもふ
 あるのではなからうかと思ふ。
 (一)倭寇の船首には八幡大菩薩の船旗を押し立て、進んだ。
 詭計
 かりごと。
 臭味
 におひやあぢで、即ちくさみ、やうす。
 酷似
 よく似て居ること。
 (二)福富草紙、奇妙の藝能ある福富の翁といふもの、隣の物談をする翁との成功と失敗を寫した話。
 (三)日本、印度、支那に傳はる種々の面白話を集めた本。鎌倉時代のもの。鎌倉時代のもの。

者となれり。然れども兎が幾度か狸を欺き、遂に之を土舟に溺れしむるまで、其の狡猾なる性質の残りたるもをかし。
 童話は口々に傳承せらるゝを以て、時代によりて多少の變化をなし、時代的特調を帯び來る。桃太郎の鬼が鳥征伐は、其の起因神代の説話に本づくが如くなれども、其の現形を成せるは、足利時代にはあらじかとおもふ。所謂八幡船に乗りて朝鮮支那の邊海に押寄せたる倭寇の侵掠は、桃太郎の遠征談を形成せしめしならんと思はる。かちく山の土舟木舟の詭計といひ、猿蟹合戦の復讐戦といひ、總じて今日まで遺れる童話は、戦國時代の面影を傳ふるもの多し。花咲爺は花の國、櫻の國たる日本の童話として最も相應しく、極めて平和的なれども、それすら人悪き爺は殿様に縛られ或は殺さるといふこと、尙封建時代の臭味を帶ぶ。足利時代には之に似たる説話ありて、花咲爺は之より出でたるが如し。竹藪の中に雀の宿を尋ねたる舌切雀は、腰折雀といひて酷似したる話。鎌倉時代に出來たる宇治拾遺物語に出でたり。
 童話は時代の性質をあらはすのみならず、其の中亦自ら國民の性情を發

峻烈

きびしい
あはげしい
むね

Thomas

Knock

lake

George

Knock

米國細首州ア
 デロンゲック
 の山中にある
 湖。湖岸の風
 光の明媚な
 を以て知られ
 てゐる。長さ
 三十哩、幅一
 哩乃至四哩。

我が意を得たり

我が思ふ所をいつて居る。

紫明
 山紫水明の略。

露す外國之童話は我のに比して、峻烈慘酷なる筋のもの多し。

二 世界的水路としての瀬戸内海

小 西 和

米人トーマス・ノックス氏は嘗て瀬戸内海を遊覽し、「我が米國に在りて、殆ど其の廣袤を等しうし、邦人の盛に之が風光を賞讃する彼のジョージ湖の景趣に勝ること、其の幾層倍なるを知らず。若し此の湖水を以て普通の金剛石に比すべしとせば、瀬戸内海は慥かに磨き上げたる金剛石に値し、優に世界最高の寶とするに足らん。」とまで讚美した。
 ノックス氏の此の言に對しては、頗る我が意を得たりと謝したいやうな氣もするけれど、翻つて考へるに、内海を金剛石に譬へた同氏は、單に之を風景の上から觀察したのみである。随つて其の價值も亦美の一點張で定めたものと認める外はあるまい。然るに瀬戸内海は紫明の風景を外にするも、尙他の種々の點に於て、極めて大なる價值をもつて居り、就中、内海が世界的の

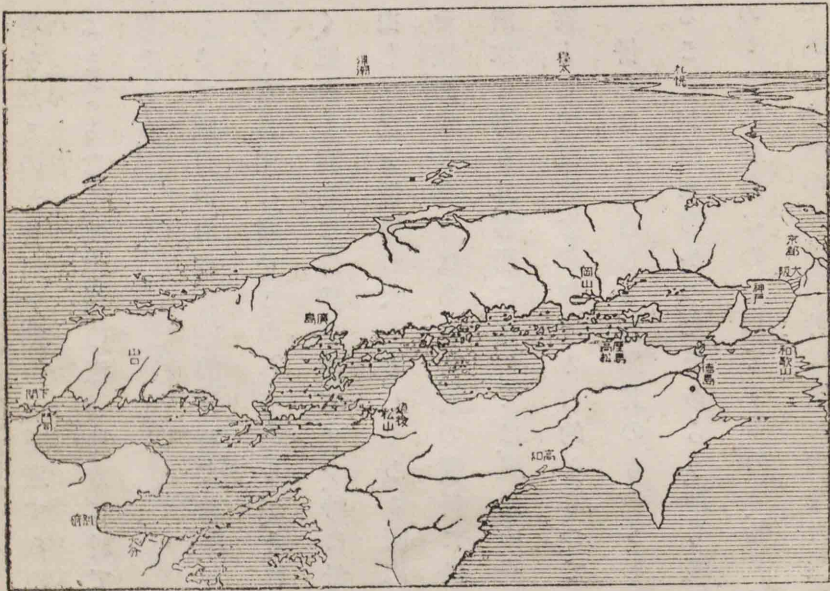
互寒
嚴寒に同じ
る、こほる。

度外視す
眼中に置かな
乃至
偏東西
又、
東西にかたよ
つて居ること

水路に當り、其の大道の一部として、各國の交通上に尠からの貢獻をなしつ
つあることは、決して見逃すべからざる所である。
抑、南北の兩極地方は、氣候互寒、氷雪堆積の爲、到底人類の生活に適しない
から、航海船舶の如きも、勢ひ之を避けねばならぬ。其の結果、世界の交通路の
幹線は、自ら東西に通じ、東或は西に向つて地球を一週することの頗る容易
便利となつたに拘らず、南又は北を指して進むが最後、極帯に入つて遂に行
止りとなる外はなく、さなくも危険と困難を冒し、且不便と不快を忍ぶこと
を覺悟せねばならぬのである。

しかのみならず、東西の兩大陸をはじめ幾多の島嶼は、何れも皆陸地の面
積に比して三倍もある程の海洋に圍まれて居るから、世界の交通は、到底海
上の運漕を度外視する譯に行かぬといふよりも、寧ろ之を以て其の主なる
ものと見ねばならぬ。随つて如何に陸上の交通機關が充實しても、之を海上
のそれに結び附けなければ、其の効果を完うすることは出來ない。かくて世
界の主なる水路は、東西乃至偏東西に延び、何時も最良な船舶が頻繁に此の

南北のそれ
南北の水路。



瀬戸内海島嶼圖
(小西和原氏圖による)

間を往來しつゝあるに拘ら
ず、南北又は偏南北の水路に
は、一つとして世界的に重要
なるものがないばかりでな
く、之を辿つて居る船舶も、亦
概して第三流以下に限られ
てゐる。則ち東西に亘る水路
は、世界の大道たる位置を占
め、ちやうど市街の本町通に
當る譯であるけれども、南北の
それに至つては、何れも寂し
い横町たるに過ぎず、全く支
道といふ格に居るのである。
世界の水路は北半球の温

帯を辿るのが普通で、熱帯を經過するのは、特殊の場合に限られるが、こは言ふまでもなく、北半球の温帯地方に於て、人口の集中と文化の發達が著しい爲である。

さて瀬戸内海は比較的極めて狭隘けうあいな上に、陸地を以て其の四面を繞らし、辛くも外洋に通ずるのみであるが、それにも拘らず、多數の船舶が距離も短く、航海も容易な外洋を往來せず、特に針路を迂曲し、殊更に面倒な内海を経由して、之を世界の大道としてゐる所以は、勿論神戸其の他に寄航して貨客を積卸つみおろしする爲ではあるが、其の燃料に供すべき筑豊ちくほうの石炭と、航海に必要な清水を得る外、客船に在つては、風光の絶佳な瀬戸内海を通航することを呼物として、乗客を吸収する目的をもつてゐるに相違ない。

併しながら、若しも内海其のものゝ形状が悪いならば、到底世界の大道たることが出来なかつたであらう。即ち瀬戸内海は位置の良好に加ふるに、其の形状の適當なのを以てするので、始めて世界的水路の一部を占め得たのであるが、就中左の三件は實に内海の生命ともいふべきものである。

貨客

貨物や乗客。
筑豊
筑前と豊前。

礁瀬

岩や淺い流。
(一)揚子江以北の支那沿海の總稱。
(二)Black Sea、土耳其と露西亞との間の内海。
(三)由良海峡、關門海峡、早吸海峡の三方。

第一に、瀬戸内海は其の幅員が狭いに拘らず、相當の長さを有し、船舶の通航に極めて都合よく出来て居る。而も幅員の狭きに失し、或は礁瀬せうらい其の他の障害のある爲、船舶の往來、乃至すれ違に困難を見るといふやうな場所が極めて尠く、却つて所々に幅の廣い海面を存してゐて、何處までも人工の運河のやうに出来て居る。

第二に、瀬戸内海の形が如何によいとしても、若し内海が南北に長かつたならば、横的に成るから、さ程の價値があるまい。即ち其の東西に長いことが、其の縦貫航路をして、世界の大道たらしめた所以である。

第三に、形状と方向に缺點がなくとも、若し瀬戸内海が黃海(一)や黒海(二)や、波斯灣の如く、單に一方口だつたならば、やはり世界的水路と成り得なかつたに相違ない。然るに其の南東(三)、北西、南西の三箇所に廣狹の宜しきに適うた天然の出入口が都合よく配置され、船舶をして自由に之を通航せしむるのは、元來一方口であつた地中海に、人工の蘇西運河(四)を開鑿して二方口としたものよりは、よほど善く出来て居る。

(Suez)

布置くはりおくり
いふも更な
いふまでもな
誇張的おほげき
National
Pride (國自
慢)

爛雅みやびやか

乾坤てんてん
無聊むじょう

Retreat
Arabian
Sea
Alten.
Alten.
Alten.
Alten.

海陸の配合、山水の布置はいふも更なり、氣候、草木、魚鳥から人情風俗に至るまで、一として純美ならざるなく、温帯の圈内に於ける總べての長所を兼有せるものを需めれば、世界中まづ以て、指を我が日本群島に屈せねばならぬ。而もこれは決して誇張的の言やナショナル、ブライドでなく、一般の航海業者を首め、各國の旅行家が等しく認める所である。されど我が國の北半部は陸の日本ともいふべく、其の山水が聊か粗大を免れ難いので、眞に明媚秀麗な風光、爛雅優美な景趣を以て充されて居る所は、海の日本たる南半部に於て認められる。就中、瀬戸内海方面の一帶は、山水の粹を鍾めて悉く之を配列したかの如き觀があつて、最も秀麗、最も優美の乾坤を形造せるものといはねばならぬ。

元來歐洲と東洋の間に於ける水路は、割合に山水の變化が多い箇所に當つて居るから、此の間を往來するものは、さまでの無聊を感じない。併し船が地中海を後に見て、蘇西の運河を出ると、世界的水路の中で最も炎暑の甚だしい紅海を辿らねばならぬ。亞丁に寄泊したとて、更に賞すべき風物がなく、

須臾しゆゐん
Arabian
Sea

(二)名は壯吉。東京の人。小説家。
(三)長崎より南二里。
(四)入海のやうになつて居る千石灘。
(五)肥前國南高來郡。長崎より南二十里。

須臾の上陸を樂しまうにも、劣等な土民がうるさく附纏ふといふ始末。それから亞刺比亞海を越え、印度洋を過ぎて、新嘉坡に着くまでの長い航海には、時折陸地や島嶼が眺められるけれど、樹は毒々しい程の翠色、花も亦目を眩するばかりの濃色、而も熱帯に於ける植物の特徴として、幹や葉が徒に長大なばかりだから、殆ど何等の快感をも起すことが出來ないのである。此の景趣に飽きた海員や船客が、まさに瀬戸内海に入らうとするに臨んで、優美な山水に接すれば、宛もモスリンの友禪から、眼を御召縮緬に轉するやうな感^(一)を起し、愈内海に入るに及んで、竟に期せずして秀麗な神苑に遊ぶの心地がするの^(二)は、理の當然と見るべきであらう。

—瀬戸内海論—

三 長崎

永井荷風

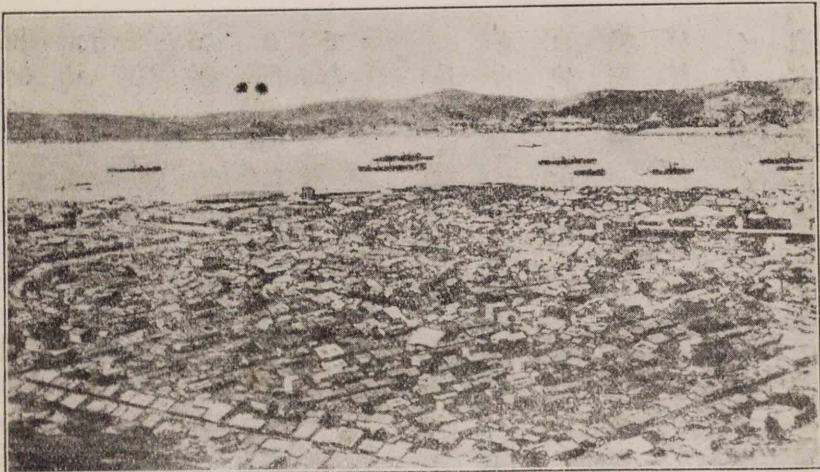
八月中旬、横濱から上海行の汽船に乗つて、神戸、門司を経て長崎に上陸し、更に山を越えて、茂木の港に出で、入海を横切つて、島原半島に遊んだのち、歸

道は同じく上海より歸航の便船を待つて、同じ海と同じ港を過ぎて、横濱に上陸した。二週日の間、自分は海ばかりを見た。島と岬と岩と船と雲ばかりを見た。今だに強い海洋の香氣と色彩とが、腸まで浸渡つてゐるやうな心持がする。

自分はどういふ理由から、夏の旅行の目的地に、殊更暑いといはれた南方の長崎を選んだのか、自分ながらも少しくその解釋に苦しむのである。自分は唯廣々とした大きな景色が見たかつた。自分は出来るだけ遠く自分の住んでゐる世界から離れた心持になりたかつた。この目的の爲には、汽車で内地の山間を行くよりも、船を以て海洋に泛ぶに如くはない。海は實に大きく自由である。夏の大空に輝く強い日光、奇怪なる雲の峰洋々たる波浪、壯快なる帆影、すべて自由にして廣大なる此等の海洋的風景は、如何に自分の心を快活にしてくれるであらう。

自分は海に沈むすさまじい夕陽の色に酔つた。岬の岩角を噛むおそろしい波の牙を見た。緑色をした島の上に立つ眞白な燈臺を見た。山の裾に休息

不知火
毎年陰曆七月
晦日前後、九
州三角、有明
附近の海上に
あらはれる無
数の火。
祖國
と本國。即



長崎市街と長崎港

して居る哀れな漁村の屋根を見た。暗夜に舷を打つ不知火の光を見た。水夫が叩く悲しい夜半の鐘の音を聞いた。異なつた人種の旅客を見た。自分の祖國に對する其等の人々の批評をも聞いた。港に入つては活氣ある波止場の生活を見た。新しいさまざまの物音を聞いた。いろ／＼な船といろ／＼な國の旗を見た。そして自分の見たり聞いたたりした其等の物は悉く自分の心に向つて、この世の生存のいかに愉快であるかを歌つて聞かせるもののやうに思はれた。夜半人の寢靜まつた時、唯一人舷に倚つて水を凝視すれば「死」がいつも自分の前に廣がつてゐる

機關の一呼吸
機關の一廻轉
をいふ。

(一)長崎に寺の多
いのは、幕府
時代に切支丹
宗を撲滅せん
爲にとつた政
策の結果であ
る。
(二)基督教を往時
我が國で呼ん
だ稱「本國」と
は葡萄牙のこ
と。葡萄牙か
ら渡來したの
である。
情調
こころもち。
気分。

事を自覺するにつけ、自分は美しい星の下なるこの人生に對して、殆ど泣き
たい程切なく鋭い愛着の念に迫られるのである。
波浪を蹴つて進んで行く汽船の機關の一呼吸する響毎に、自分の心は其
の身と共に、遠い未知の境に運ばれて行く。昨日も海、今日もまた海。そして四
日目の朝に、自分は繪のやうに美しく細長い入江の奥なる長崎に着いたの
である。

二

長崎は京都と同じやうに、極めて綺麗な物靜かな都であつた。石道と土塀
と古寺と墓地と大木の多い街であつた。花の多い街であつた。樹木の葉の色
は東京などよりも一層鮮かに濃いやうに見えた。東京の蟬とは全く違つた
鳴聲の蟬が、夕立の降つて来るやうに市中到る處の樹木に鳴いてゐた。果物
を賣歩く女の呼聲が、濕氣のない晴渡つた炎天の下に、長崎は日本からも遠
く、支那からも遠く切支丹の本國からも遠く、處である事をしみる、と
旅客の心に感じさせるやうに響く。このいひ難い遠國的な情調は、長崎の街

夕風
夕方風のなく
なること。

森閑
ひっそりして
しづかなさま。
ま。

(一)長崎の山の手
地にある一街

梵鐘

寺のかね。
(二)長崎は一面を
海にし、三方
は雜壇のやう
な山に圍まれ
ちやうど圓形
劇場の形にな
つて居る。

餘韻

のこつて居る
ひびき。
俗縁を斷つ
世俗の世界と
關係をたつ。

街の端れにある古寺の鐘の音によつて、一層深く味はひ得られるのであつ
た。

自分は未だ嘗て長崎に於けるが如く、軟な美しい鐘の音を聞いたことは
無い。上陸した最初の日の夕方、長崎の夕風とか稱へて、烈しい炎暑の一日の
後、入日と共に空氣は死するが如く沈靜し、木葉一枚動かぬやうな森閑とし
た黄昏、自分は海岸から掘割を傳はつて、外國人向の商店ばかり並んだ一條
の町を過ぎ、丸山に接する大徳寺といふ高臺の休茶屋から、暮れて行く港の
景色を眺めてゐた時であつた。何處からとも知れぬが、確かに二三箇所から
一度に撞出される梵鐘の響は、長崎の町と入海とを、ちやうど圓形劇場のや
うに圓く圍む美しい丘陵に遮られて、夕風の沈靜した空氣の中に、如何にも
長閑に軟く、そして何時までも消えずに一つ處に漂つてゐる。最初に撞出さ
れた響が長く空中に漂つてゐる間に、新しく撞出される次の響が後から後
からと追ひかけて來て、互に相連れ合ふのである。連れ合ふ鐘の餘韻は、はや
とつぷりと暮れ果てた燈火の港を見下す自分の心に向つて、早く俗縁を斷

法の御山
高野山は眞言宗の本山なればいふ。

(一)昔から傳へて居る佛法僧鳥も佛法を修行して居ると見えて、高野山の有明の月に鳴く聲が聞えるとの意。
(二)徳川中世の文學者。文化七年(二四七)歿。年七十八。
(三)秀吉の異父妹の子。非行により文祿四年(二五五)高野山に放たれ賜はつた。死を二十七年。

亭々
まつすぐに高くとびえるさま。

とあるやうに、其の啼聲が「ぶつばふそう」と聞えるさうで、法の御山にふさはしい靈鳥として、特にもてはやされて居る。秀吉の歌といふに、

傳へにし鳥も御法を行ひの

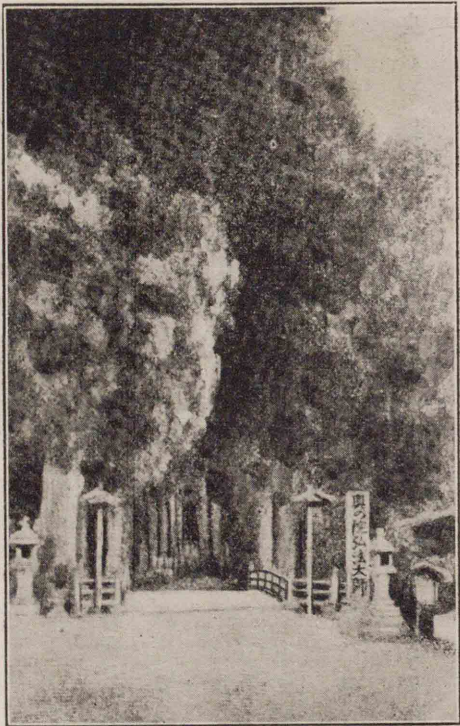
こゑは高野にあり明の月

とかいふのがある。公卿、僧侶の歌は固より澤山ある。中にも上田秋成は、此の鳥に豊臣秀次の幽靈を配して、雨月物語の一章として居る。其の物語は、趣味ある文字として、嘗て愛唱した事があつた。

今夜愈々未央君と共に奥の院へ行つて、佛法僧の啼聲を聞いて來ようと、小僧から提灯を借りて表に出る。表は暗い。星はあるが、僅かに寺の白い土塀と道との區別がつく位だ。提灯を便りに其の白い土塀に沿うて、表通の奥の院通に出る。

門前の珠數屋も、もう戸を下して居る。一の橋を渡ると眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩するやうな大木が、襖の如く連つて居る。其の左右を襖でたて切つた中に、帯のやうに幅の狭い空が見える。その空には星が光つて

居る。平生見る星よりは形が大きい。而も其の一帶の星の光では、我等の行手を照すに足らぬ。我等は提灯の光で僅かに足許を探つて歩く。晝間は氣が附



高野山の奥の院の道

かなかつたが、縦横に道を横ぎつて居る木の根の夥しいのに驚かれる。其の木の根は、左右に延びるに随つて隆起して、終に杉の大木に集つて居る。未央君は提灯を差上げて、其の杉の幹に推し

つけるやうにして歩く。未央君が三間ばかり歩いて、まだ杉の半面を照し盡さぬ。夜の杉は、大きさのわからぬ巨人の如く突立つて居るのである。寢鳥の立つ音がする。見ると、提灯の上から圓筒の如く丸い光が空に射出

野ぶすま
おまじびのこ
ともんが

(一) 狂言の曲名。
又「こんくわ
い。」
(二) 狐を釣る獵師
のをち坊主。
(三) 弘法大師の
廟。奥院谷に
在る。
(四) 御廟の側を流
る、溪流。
(五) 御廟の拜堂。

されて、それが高い、杉の梢を彷徨いて居る。寝鳥が泡を食ふのも尤もだ。歩きながら未央君に雨月物語の話をする。墓原の中に裸火らしい火が二つともつて居る。何處やら心細くなる。かういふ時に、野ぶすまが道を塞ぐのだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のすつと奥に、うすぼんやりと明るいものが見える。何であらうかと氣にしながら行くと、突然木の間に空が見えて、其處に鎌のやうな三日月がかつて居る。向ふからふらふらと提灯が一つ来る。急に見えなくなるのは、杉の木に隠れるのであらう。すぐまた現れる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれちがひさまによく見ると、「釣狐」の狂言に出る白藏主に似て居る。行手に燈籠らしい灯が三つともつて居る。近よつて見ると御廟の橋だ。未央君が橋の上から提灯をつり下げて、水面を照して見る。玉川の水は火を受けてちらちらと流れて居る。燈籠堂はもうすぐ其處に在る筈だが眞暗でそれらしいものは見えぬ。怪しみながら近よつて見ると、すつかり四周の藪を下して、寂然として、寝静まつてゐるやうだ。

また、く
ちらくする
さま。
鉦
伏せておいて
たく、佛具。
又ふせがねと
も、た、いきが
ねともいふ。
(一) 大和國生駒郡
法隆寺村。聖
德太子建立。

燈籠堂の裏側の縁に腰をかける。縁に置かれた提灯の灯が少し離れて心細さうにまたゝいて居る。遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境内でも聞えさうなよい音だ。方角は御廟の後に當る。そんな方に寺は無い筈だが、不思議だと思ふ。其の鉦の音に聴きほれて居ると、忽ち近い木の梢で、けたましい啼聲が起る。何でも朽木を引裂くやうな殺氣を帯びた聲だ。或は天狗のやうな嘴をした、鬼のやうな手をした鳥で、忽ち空中から落下し來つて、提灯をさらつて行くやうな事はあるまいかと氣になる。氣のせい、か提灯の灯は一層心細く瞬いて居る。

小さい咳拂が聞える。「おや」と思ふうち、また一つ聞える。其の邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子に、ちよつとした明りがある。こゝは晝間線香などを賣つてゐた處であるから、直ちに番人の部屋と想像がつく。試に其の傍に行つて、「もし、もし」と呼んで見る。「へい」と返事をする。「ちよつと伺ひますが、あの恐ろしい啼聲をする鳥は何といふ鳥ですか。」と聞く。「あれは鳥ぢやない、獸です。」といふ。「へえ、何といふ獸です。」と聞く。「野ぶすまといふて、蝙蝠のや

うな、馴のやうな、妙な恰好をした獣です。」といふ。あれが野ぶすまかと合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つて居るやうですが、あれは何處ですか。」と聞く。番人はちよつとだまつてゐたが、「あれは鉦ぢやありません。鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です。」といふ。

鉦の音かと思つてゐたのが、鳥の啼聲であつたのは意外であつた。殊にそれが、それを聞きたさにやつて來た佛法僧であつたのは愈、意外であつた。「あれが佛法僧ですか。」といつたまゝ、暫く無言で二人とも耳を傾けた。やはり「かんかん、かんかん。」と鉦の音のやうな響に聞える。たゞさう思つて耳を澄すと「かん」と響くまへに「ぶつ」といふ低い音が聞える。「ぶつ」と低く響いてから「かん」と高い冴えた音が響く。つまり「ぶつかん、ぶつかん」と鳴いてゐるやうに聞える。多くの書物には、文字通り佛法僧と鳴くとあるが、雨月物語には、佛法といふ字にわざ／＼「ぶつばん」と假名が振つてあつて「ぶつばん、ぶつばん」と鳴くと書いてあつたやうに記憶する。實際の啼聲は「ぶつかん、ぶつかん」と聞えるが、まづ雨月物語の「ぶつばん」に近いやうだ。

ものかは
い。なんでもな

夜陰
夜中。
荒膽をひし
く。
非常におどろ
く。どきもを
ぬく。

妙なもので、初は鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは、まさしく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。初め鉦の音を聞いた時も、嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を連想したが、これが生物の喉から出る聲だと知つてから、其の金鈴の響に濕ひのある事に氣がつく。番人が「大概夜中の二時か三時頃にならんと鳴かんのに、今晚は宵の口から頻に鳴いて居た。」といふさういふ内も、絶えず「ぶつかん、ぶつかん」と聞える。普通の鳥とは餘程違つて居る。法の御山の靈鳥として耻づかしからぬ不思議の鳥だ。古來幾多の詩歌が、これをもてはやしたのも尤もだ。私は嘗て、高野の山の靈山であることは、奥の院道の杉の大木で證據立てられるといつたが、否々、杉はものかは、獨り此の佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。

見ると、縁の端に置かれた提灯の灯も、今は靜かに點つて居る。番人は、淋しい燈籠堂の夜陰に、偶、話相手を得たので、問ひもせぬのにいろ／＼話をす。ふと氣がつくと、佛法僧はいつの間にも鳴かぬやうになつてゐた。唯野ぶすまが、時々荒膽をひしぐやうな啼聲をする。

(一)御廟の橋の東傍に在る。

(二)曲亭馬琴。「八犬傳」の作者。

(三)馬琴七十五歳の辛丑はかのとうし。

葉月 陰曆八月。

稿本 原稿。

全局を結ぶ 全部完結する。

髻年 幼年。

(四)馬琴二十四歳。

(五)戯作の書入草草紙「廿日餘五十箇書用而二分狂言」。

物の本 小説本。

(六)馬琴三十八九歳より五十歳餘。

(七)午後十時。

歸途につく。御廟の橋にかゝつた時未央君が「また鳴く」といふ。向ふの墓原を縫ふやうに提灯が一つ来る。女が三人に男が一人。南無大師遍照金剛」と唱へつゝ、水向地藏の前を通る。

——十五代將軍——

五 著作の苦心

瀧澤馬琴

今茲天保十二年辛丑の秋葉月まで、星霜二十八年にて、八犬傳稿本思の儘に全局を結ぶ。

われ髻歳の時よりして、書讀むことを好みしかば、人となるに及びては、一日も書卷を把らざるることなし。かくて寛政二年の冬、初めて戯墨の繪草紙二卷を編みてより、今に至りて五十二年、刊行の雜書物の本共に二百九十餘筆に及び、此の他刊布せざる筆記雜纂數へ盡すべうもあらず。就中文化の頃は日毎に夙におき出で、机にむかひつゝ、其の夜亥の時まで稿本を綴りて人の爲に疲を厭はず、亥の時過ぎては睡氣づくまで書を読み、自らの樂みにす。若し佳境に入る時は夜の明くるのを覺えず隣鶏の鳴くに驚かされて、

逆上のぼせること。

瞑眩 目がくらむ。

晤譚 對談。

九石の弓 強弓。

名利の爲に殉ず 名譽と利益の爲に死ぬ。

還曆の年 六十一歳。

(一)みづのとみ。天保四年。馬琴六十七歳。

(二)馬琴の子。興繼。琴嶺と號した。醫を業とした。

流行目 傳染性の眼病。

やがておき出でて、又机に向ふ日もありけり。かくて年頃を経ぬるまゝに、逆上口痛の患起りしより、年五十に至りては、齒は皆年々に脱けて、一枚もあらずなりぬ。且夜枕に就く時、仰ぎ臥せば、瞑眩して堪へられず、横に臥せばさもなかりき。此の頃一名醫と晤譚の折、此の事を告げしかば、名醫驚きて「足下生來血氣人に勝れたれども、人の氣根は限りあり。九石の弓も毎に緊しく張りて弛めざれば、其の弦斷れざるを得ず。其の樂しむ所をもて、名利の爲に殉ずるは賢者のせざる所なり。今より少し緩めよ」といはれし由の理なれば、これより夜學せず、夜は亥の時を限りにして早く枕に就きしかば、漸々に安く覺えて、仰ぎ臥しても瞑眩せず、ひたすら養生をむねとしける程に、我が還曆の年大病に罹りて、命危かりしも、幸にして瘥りにき。

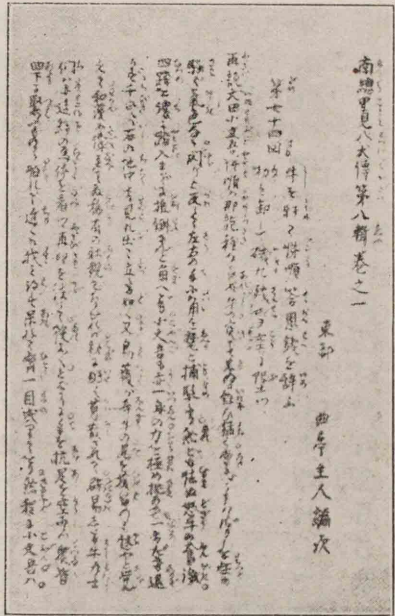
こかくする程に癸巳の秋八九月の頃にやありけん、或朝ふと起出でけるに、右の一眼見ることを得ず、打驚き且訝りて故兒に示すに「腫子の上方流れたり、療治なさるべし」といひけり。其の後親族朋友治療を勸むる者多かりしかど、われ敢へて従はず、且思へらく、われは幼きより眼の患なく、流行目だ

にも病みしことあらず。ざるを今一朝に右の目を失ひしは、年來讀書筆硯の
疲なるべく、且冬春毎に高き火桶を座右におきて、机邊の寒さを防ぐこと既
に久しくなりしかば、其の火氣何時となく右の目に入りて乾かされたるに

南唐書見八代傳第八卷之一

東部 西平主人編次

草根木皮
當時の醫師は
漢方醫で、藥
として、草の
根や木の皮を
煎じて用ひ



(代時全健)稿草傳犬八筆自琴馬

ぞあらんずらん。譬へば老樹の
片枝枯れたるに異ならず。よし
や醫療に手を盡すとも、草根木
皮のよく及ぶべきにあらずと
思案して、一日も筆硯を排斥せ
ず。初は硯の中見えかねて、筆を
染むるに不便なりしに、それも

(一)天保六年父に
先だつて歿。
憂にあたる。
忌中である。

(二)つちのえい
ぬ。天保九年。

慣れては不便にも思はず。其の後故兒の憂にあたりし年も、世渡りなれば忌
ごもはてゝは、又筆を把らざることを得ず。其の次の年四谷へ移徙しても、左
の目は異なることななければ、著篇は尙年月に綴りぬる程に、戊戌の春の頃
より何となく左の目も亦翳むやうなりしに、夏に至りては愈、其の異なるを

凌ぐものか

し。のぎはする
もの。

(一)つちのとぬ。

天保十年。

二八犬傳。

(三)天保十一年。

長月
陰曆九月。

し。ごろもご
ろ。

ひどくらんざ
つなさま。

宅眷

家族のもの。

霜月

陰曆十一月。

覚えしかごも尙悟らず。こは眼鏡の曇りたる故ならんと謬り思ひて、世に本
玉とかいふ水晶製の眼鏡の價貴きを厭はで、これかれと多く購ひ求めて、掛
替へ掛替へ凌ぐものから己亥の春に至りては愈、翳みて、病眼なるを知りな
がら、本傳いまだ大團圓に至らねば書肆の需を否みも得ず、なほ辛うじて綴
るもの此の外にもありけり。

かくて去歲の春までは、本傳の稿本も故の如く十一字行細字にもせし
かごも、夏に至りては只朦々朦々として、細字を書くこと得ならねば、其の稿
本を五行の大字にしつ。それも手撈りにて去年の秋長月、本傳第九輯四十五
の巻まで綴り果しにき。

かくては明年四十六の巻以下を綴り果さん事心もどなし。いでや尙かく
てある程に、今一卷なりとも綴らばやと愚心を勵まして、第九輯百七十七回
を、五行或は四行の大字にもものしぬるに、字の形もしごろもごろにて、且墨の
續かぬ處ありてよみ難しといへば、そを宅眷に補はせなごしぬる程に、霜月
に至りては、宛ら雲霧の中に在る如く、又隴月夜に似て、一字も書く事得なら

筆研 筆硯に同じ
筆やす
りて即ち書く
こと。

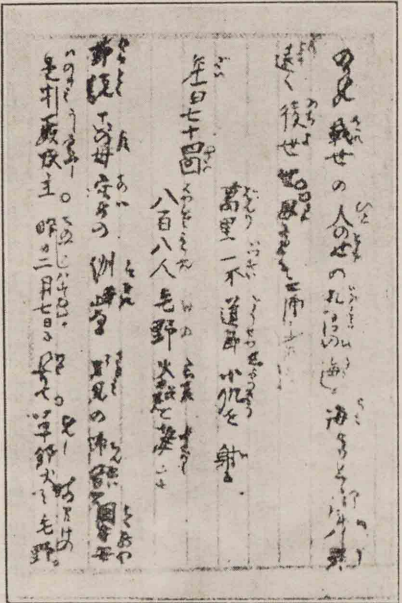
(一)下總國といふ
又常陸國と

書卷川にな
はわたる
書卷の著者で
渡世する。
うればはしく
憂ふべく。な
げかはしく。

あり難き
いゆつたにな

すなりぬ、只筆研不自由なるのみならず、書畫を見てもしかと見えず、纔かに
晝夜を辨じ、東西を知るのみ、いかにもせん術なければ、机を退け筆を投捨
て、獨り歎息の餘りに、

ながらふるかひこそなけれ見えすなりし書卷川になほ渡る世は



(後前失明眼河)稿草傳犬八筆白琴馬

まで、人の薦むる醫師三名まで替へたれども未だちとも驗あらず。
されば今茲の春に至りてわれ又思ふに、八犬傳は今昔あり難き大部の物
の本なるに、始ありて終なくば、たゞ看官の飽かず思はんのみならず、残り惜

人の爲に云
人の爲にたる
やうにはから
ないのは。

夢路を辿る
心地
夢見て居るや
うな心地。
(一)伊勢國鈴鹿郡
筆捨山。

しくこそあらんすらめ、人の爲に謨りて忠ならぬは、われも亦耻づる所なり。
さればとてわが孫興邦はなほ乳の香ある幼心うせず、且武藝を好める本性
なれば、かゝる助になるべくもあらず。彼が母は人並ににじりがきもすなれ
ば、教へて代寫せさせばやと、やうやくに思ひかへしつ。第一百七十七回より代
筆せさせて、一字毎に字を教へ、一句毎に假名遣を誨ふるに、婦人は普通の俗
字だも知るは稀にて、漢字雅言を知らず、假名遣てにをはだにも辨へず、扁旁
すら心得ざるに、只詞をのみもて教へ書かするわが苦心はいふべうもあら
ず、まいて教を承けて書く者は、夢路を辿る心地して、困じて果は打泣くめり。
筆捨の松のふる葉も言の葉も子等にをしへてかゝするぞ憂き
と打詠じて、且慰めつゝ、一二卷代寫せさせぬる程に、彼もやうやくに慣れて、
苦心初の如くにあらず、扁旁などは稍辨へ知りて、言を費すも舌の疲るゝま
でに至らず、篇中は挿繪は代寫せさす、べき者なければ、われ只其の人物を圈
點してもて畫工に傳ふるに、こまかに注文を代寫せさせぬるのみ、稿本はさ
らなり、書畫工の寫本もわがいふ如く書けりやあらずや、心許なく思へども

賦舌侏離
變夷の語。鳩舌は野蠻人のわからんことば。侏離は野蠻人の語聲の形容。取りにくい
 薪炊
火をたいたり物を煮たりすること。

術なし。まいて文中に故事などを引用ひんと思ふに、原本に涉らざれば諸記の過あらんことを恐れて、命じて其の書を取らせさせて讀まするに漢籍は及ぶべくもあらず、假名まじりの古書と雖も、傍訓なきは得讀ます。強ひて讀ますれば、賦舌侏離にて要をなさねば、援用ふべくもあらず。書かすることは教へもすれど、讀ますることはわが見るにあらざれば、いよ、難儀にて、實にせん方なし。されども教を承くる者の、困しながらも、倦くまでよく勉むるにあらざれば、此の十卷を綴り果して局を結ぶに至らんや。縫刺の技薪炊の事なごこそ彼が職分なれ、文墨風流の事に代らせて其の要をなさまく欲するは、わりなしともわりなしと知りつゝも、月を累わて今茲辛丑の秋葉月二十日といふ日に、本傳の結局大團圓までやう／＼稿し果てたりき。

—南總里見八犬傳—

三訂帝國讀本卷七終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。)

劍	剪	刃	函	滅	涼	準	况	決	冒	免	免	佞	佞	兩	通用正		
劍	剪	刃	函	滅	涼	準	况	決	冒	免	免	佞	佞	兩	通用正		
冤	牆	塚	場	噴	器	唇	叙	収	厥	厨	卿	鄉	即	効	通用正		
冤	牆	塚	場	噴	器	唇	叙	収	厥	厨	卿	鄉	即	効	通用正		
拔	拿	戲	懣	懣	恆	往	京	屏	并	帽	尅	寶	寇	寇	通用正		
拔	拿	戲	懣	懣	恆	往	京	屏	并	帽	尅	寶	寇	寇	通用正		
濱	温	氷	殲	欸	概	桿	晋	昂	既	整	携	攢	擯	插	通用正		
濱	温	氷	殲	欸	概	桿	晋	昂	既	整	携	攢	擯	插	通用正		
盃	鼓	痴	畧	畧	畫	瑣	玄	貓	猪	猿	熔	陰	潛	濶	通用正		
盃	鼓	痴	畧	畧	畫	瑣	玄	貓	猪	猿	熔	陰	潛	濶	通用正		
續	續	紀	穀	粘	籤	纂	節	竊	秘	願	穎	稟	研	研	通用正		
續	續	紀	穀	粘	籤	纂	節	竊	秘	願	穎	稟	研	研	通用正		
厠	勅	冲	恂	俟	京	亡	並	萬	聿	耻	羹	群	罰	纏	織	通用正	
厠	勅	冲	恂	俟	京	亡	並	萬	聿	耻	羹	群	罰	纏	織	通用正	
婚	姊	妍	妊	野	坂	嚼	叶	厮	同	艷	館	舖	阜	致	腸	脉	通用正
婚	姊	妍	妊	野	坂	嚼	叶	厮	同	艷	館	舖	阜	致	腸	脉	通用正
考	慙	富	忘	庵	嶋	峯	峩	岳	同	解	霸	褒	衛	蔭	萌	莽	通用正
考	慙	富	忘	庵	嶋	峯	峩	岳	同	解	霸	褒	衛	蔭	萌	莽	通用正
概	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	同	賈	贊	賓	象	讎	讎	記	通用正
概	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	同	賈	贊	賓	象	讎	讎	記	通用正
砧	睹	狸	貉	無	烟	汗	毘	朴	同	隸	隙	問	鎖	隣	輒	軟	通用正
砧	睹	狸	貉	無	烟	汗	毘	朴	同	隸	隙	問	鎖	隣	輒	軟	通用正
縲	縲	網	紆	糾	糶	筍	競	稟	同	隸	隙	問	鎖	隣	輒	軟	通用正
縲	縲	網	紆	糾	糶	筍	競	稟	同	隸	隙	問	鎖	隣	輒	軟	通用正

附錄

羈 羈 花 華 衽 衽 谿 通 遜 雁 鴈
 船 荒 荒 訛 譌 踪 蹤 錐 錐 雞 雞
 舩 舩 虱 虱 譁 譁 躑 躑 鏤 鏤 駟 駟 驅 驅

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ畧字トシテ往々混用セラル、モノノ慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎
 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

ワタル。「連互」
 桓ニ同シ。
 笨ニ同シ。アラシ、鹿、粗。
 カラダ。
 タマシ、タマ。「但馬」
 ツタナシ、拙劣。
 ミダリガハシ、猥。
 身分ヲ越エテオゴル。「僭越」
 カプト、兜。「甲」
 ヨツギ、嫡子。父子孫。「冑裔」

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎
 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

カナフ、叶。
 オビヤカス、脅。
 サス。「刺殺。刺客。名刺」
 モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」
 星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽 台臨」
 ウチナ、ダイ。
 ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
 キミ。「皇后」
 アキナヒ。
 モト、本。
 ツボ。
 ミチ、宮中ノミチ。
 ツ、シム。
 ヒメ。

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎
 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

拓ニ同シ。オス、ヒラク。
 ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。
 ハラフ。又アゲ。
 ニナフ、カツゲ。
 鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
 アラタム。
 ヤリ。
 鎗ニ同シ。鎗ノ聲ノ形容。
 アクビ。「欠伸」
 カク。「缺席」
 ホソイト、細絲、イト。
 支那ノ地名。
 ウラヤム。

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎
 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

魚介類ノ總稱。又ママシ。
 ムシ。
 ワビ、ワブ。「謹狀」
 訕ニ同シ。アザムク。
 ヘツラフ。
 ウタガフ、疑。
 アカシ、シルシ。「證明」
 イサム、諫。
 禮ノ古字。
 エタカ。
 マア。
 エク、行。
 エラブ。(ヨリトル)
 エラブ。(書物ヲ編纂ス)

